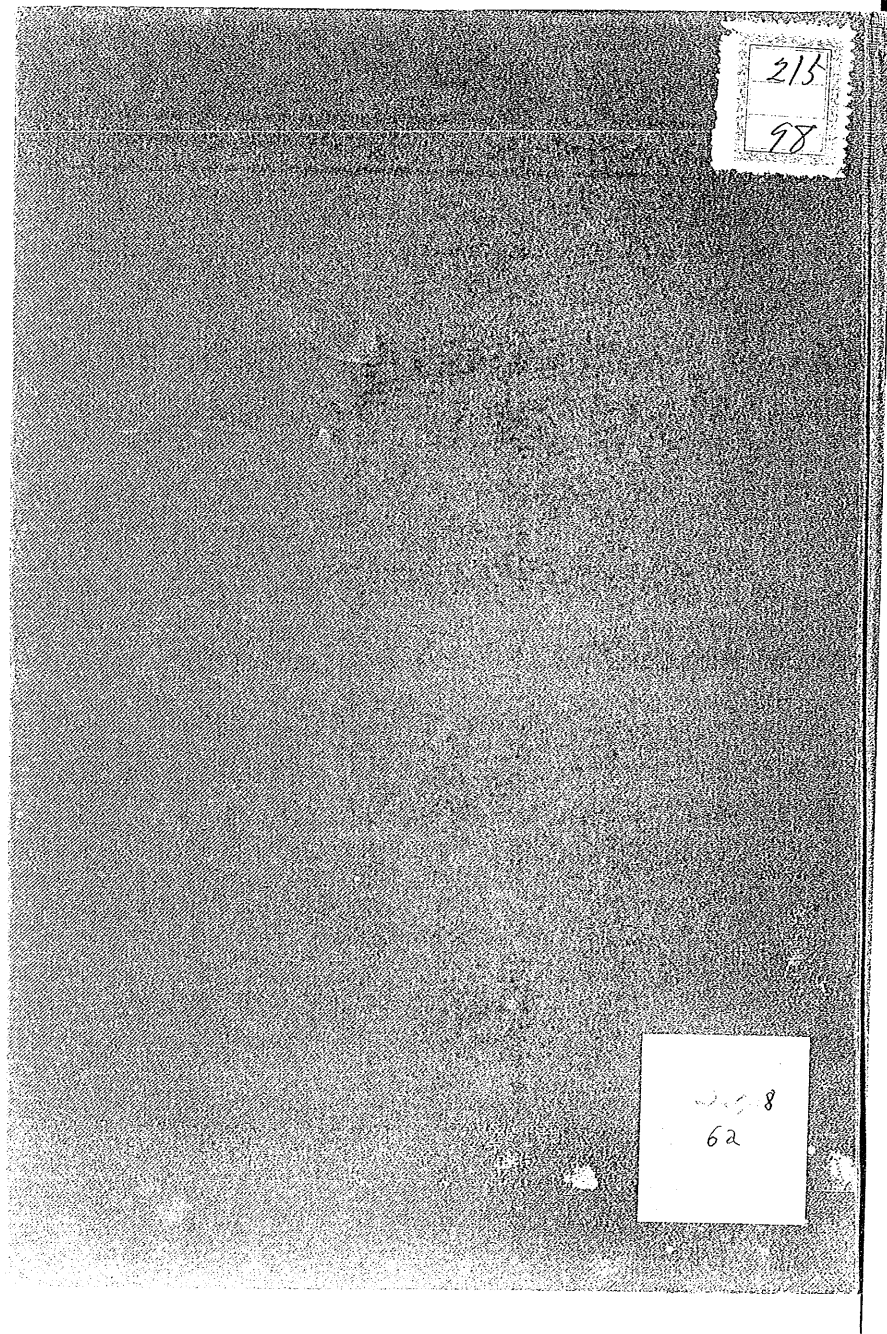
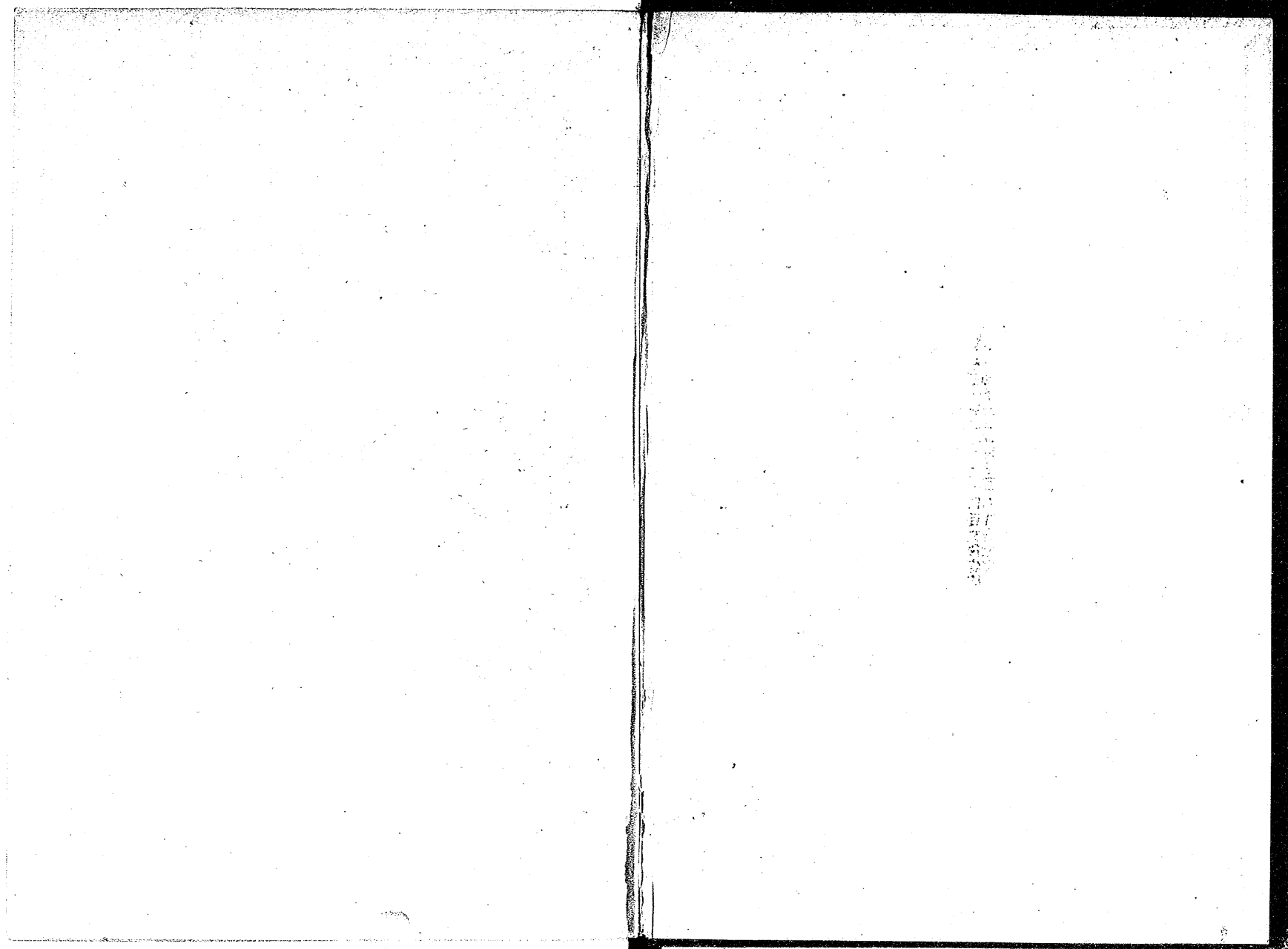




K220.28

6a



石川 弘
梅林寺勝三 合著

新撰
日本地理綱要
全

東京
合資
會社
田沼書店發行



例言

一 目的 本書は、中學校教科細目調査委員の調査したる地理科教授細目に據り、聊、著者の所見をも加へて、中學校、高等女學校、及び、之と同等の諸學校の地理科用書たらしめむとて、新に編纂したり。

一 主旨 本書は、首に總論にて、自然地理、政治地理の綱要を述べ、次に、處誌にて各地方の重要な事實を述べたり。其の處誌は、鐵道、又は、交通線路に依りて、地方と地方との連絡を知り易からしめむとせり。

地理科を、趣味なきものと思はしむるの弊を救はむがために、編述の體例を一定にせず、益なき名稱、數字を臚列せず、問、歴史文學上の趣味をも加へて、單調の病を避

けむとせり。
一教師及び生徒の注意。教師敷衍の餘地を大にせむがため、叙述委曲に亘らずして、唯、指示（指示）を擧ぐるに止めたる處多し。又、生徒をして、自、摘要、記入するに便ならしめむがため、贅頭多く餘白を存したり。

明治三十四年十一月

編者 志 志

新撰 日本地理綱要目次

第一篇 總論

第一章 自然

- 第一 位置及び廣表……………一
- 第二 地勢―山系水系沿岸……………三
- 第三 氣候―溫度風雨海流……………十四
- 第四 天産―植物動物礦物……………十七

第二章 生業

- 第一 林業……………二十
- 第二 牧畜……………二十二
- 第三 水産……………二十三

第四	農業	二十四
第五	礦業	二十六
第六	工業	二十八
第七	商業	三十
第八	交通	三十二
第三章	住民	三十五
第一	種族及び人口	三十五
第二	教育及び宗教	三十六
第四章	政治	三十九
第一	元首、立法、行政、司法、及び外交	三十九
第二	兵備——陸軍、海軍	四十三
第三	區劃	四十五

下篇	處誌	四十九
一	中域	四十九
第一章	本州中區	四十九
第一	東京府	五十一
第二	埼玉縣	五十六
第三	千葉縣	五十八
第四	茨城縣	五十一
第五	栃木縣	六十三
第六	群馬縣	六十六
第七	長野縣	六十八
第八	神奈川縣	七十
第九	山梨縣	七十四

第十	靜岡縣	七十六
第十一	愛知縣	八十一
第十二	三重縣	八十五
第十三	岐阜縣	八十八
第十四	滋賀縣	八十九
第十五	福井縣	九十三
第十六	石川縣	九十四
第十七	富山縣	九十七
第二章	本州北區	九十九
第一	新潟縣	百
第二	福島縣	百四
第三	宮城縣	百六

第四	岩手縣	百八
第五	青森縣	百九
第六	秋田縣	百十二
第七	山形縣	百十三
第三章	本州西區	百十五
第一	京都府	百十六
第二	奈良縣	百二十
第三	和歌山縣	百二十五
第四	大阪府	百二十八
第五	兵庫縣	百三十二
第六	鳥取縣	百三十六
第七	島根縣	百三十八

第八	岡山縣	百四十一
第九	廣島縣	百四十二
第十	山口縣	百四十四
第四章	四國區	百四十七
第一	德島縣	百四十八
第二	香川縣	百四十九
第三	愛媛縣	百五十一
第四	高知縣	百五十三
第五章	九州區	百五十五
第一	福岡縣	百五十六
第二	佐賀縣	百五十九
第三	長崎縣	百六十一

斗六、嘉義、鹽水港、臺	
南、蕃薯寮、鳳山、阿猴	
恒春及澎湖廳	二百二

7頁

8頁

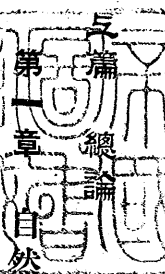
欠

第八	岡山縣	百四十一
第九	廣島縣	百四十二
第十	山口縣	百四十四
第四章	四國區	百四十七
第一	德島縣	百四十八
第二	香川縣	百四十九
第三	愛媛縣	百五十一
第四	高知縣	百五十三
第五章	九州區	百五十五
第一	福岡縣	百五十六
第二	佐賀縣	百五十九
第三	長崎縣	百六十一

斗六、嘉義、鹽水港、臺
南、蕃薯寮、鳳山、阿猴、
恒春及び澎湖廳……………二百二

新撰
日本地理綱要目次終

新撰
日本地理綱要



第一篇 位置及び廣袤

我が大日本帝國は亞細亞洲の東岸に沿ひ、東北より西南に連亘せる諸島を包括す、其の東南に太平洋あり、北に、
荷^お斯^お科^か海あり、西は、日本海、東海を隔て、露西亞領なる
樺^か太^た、西^{せい}比^ひ利^り亞^あ及び、朝鮮、支那に相對し、諸島の相連れる長
さは、一千餘里に及び、その四至は、左の如し。

東 東經一五六、三二^{度分} 千島占守島東端

西 東經 一一九、二〇 澎湖群島花嶼西端
南 北緯 二一、四五 臺灣南岬頭のべえるれえと

岩端

北 北緯 五〇、五六 千島阿頼度島北端

我が國土を成せる島嶼は、大小すべて合する時は實に二千以上の大數に及ぶ、されど、その中、稍大いなるものを舉ぐれば、五つとなる、本州、四國、九州、十州、臺灣の五島、是にして、中に就き、本州を最大の島とす。是等の島々を悉く合せて、日本の總面積は、二萬七千六十餘方里となる。之を世界著名の國々に比ぶるに、伊太利、英吉利よりは稍大きく、佛蘭西、獨逸よりは稍小さく、支那の二十七分の一に當

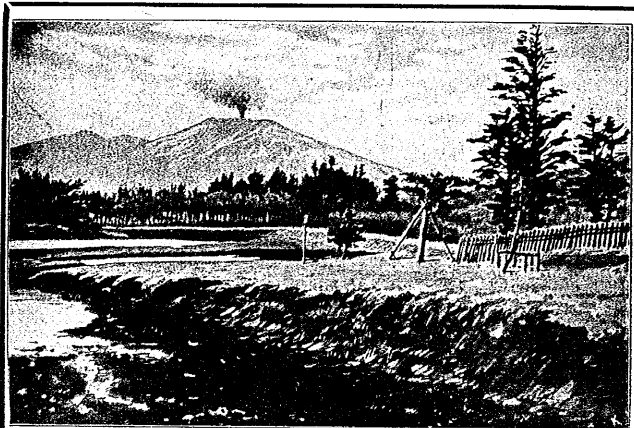
る、要するに、日本は小國にして、伊、英、佛、獨の各本國に比べてこそ、其の差は厩かなれ、それらの國は、皆、諸洲にあまたの領地を持ちたれば、之を合算する時は、いづれも遙かに日本を凌ぐ大國なり、而も、實力において彼等を凌がむは、我等國民の發憤に由らざるべからず。

第二 地 勢

人は、土地によつて生活するものなれば、土地の形勢如何は、人生をして、種々なる有様に變化せしむ、地勢の如何は、人の生業に變化を生じ、さては、人の風俗、氣質にまでも、其の變化を及ぼす。されば、地勢の、國の文明に與りて、影響すること、至大なりと謂ふべし。

山系 我邦は地形の細長き國にして、何れの處にも山あらざるはなく、平野としては、甚少くして、全面積の九分一に、過ぎざれば、日本を、山國なりといふは當れり。山は交通の便を妨碍することあれど、動植礦物を産し、或種の工業を起すに足り、水源を成し、風景を美にする等の功益は、亦、甚、貴はざるべからず。山脈の走れる方向を仔細に見るに、大抵地勢の長さ方向に並行せるものゝ如し。中にも我邦は、火山に富めること、世界屈指の國なれば、火山脈も少からず。

我が國の大山脈に二ありて、樺太山系及び崑崙山系といふ、別に、火山脈の主要なるもの、三ありて、富士火山脈、千島火山脈及び霧島火山脈といふ。



一樺太山系は、十州島の北なる、露領樺太島より脈をひき、天鹽、日高の兩山脈を以て、十州を縦貫し、再、本州の東側に現れて、北上、阿武隈、筑波の諸山脈を起す。山本州の中央を縦に走れる之分水山脈は、十州西方の後志、渡島の諸山脈より連りて、末は、足尾山脈、關東山脈となる。

分水山脈の西側なる出羽

山脈も、亦其起りを分水山脈と同じくし、共に皆樺太山系に屬す。

二、崑崙山系は、遠く支那の崑崙山脈より連り、我が九州において二脈に分る。南脈は九州南部山脈より、四國山脈、紀伊山脈、赤石山脈となり、鈴鹿山脈、木曾山脈を、其の間の主なる支脈とす。北脈は、九州北部山脈より、本州の中國山脈に連り、東進して濃飛高原となる、飛驒山脈は、其の支脈なり。

樺太山系の南端と、崑崙山系の東端とは、山脈數派に分岐して、皆本州の中央部に會合せり、此の邊、國中第一の高地を成して、地勢交雜す、こゝに一の大火山脈起る。

三、富士火山脈、即、是にして、其の脈の由來は、遙かに南洋

のよりあな群島よりし、伊豆諸島を経て、本州に入り、越後に至りて、本州を横斷す、箱根、富士、淺間、燒山などは、此の脈中に在り。

四、千島火山脈は、露領東察加半島より來りて、我が千島列島を起し、十州の東端より侵入して、良牛山、雄阿寒、雌阿寒山、石狩嶽の諸山を起し、西方樺前、惠庭、まぐかり嶽などの後志火山彙及び駒嶽、惠山などの渡島火山彙と相呼應す。此等の脈は、延いて本州に入り、樺太山系中の分水山脈と重複して中央火山脈となる。其の中、名ある山は、恐山、八甲田山、岩手山、吾妻山、磐梯山、那須山等なり。本脈の西に並行し、出羽山脈と重複したる岩木火山脈あり、岩木山に始り、鳥海山、月山より、白根山に至りて、富士火山脈に

交る。尙一條の火山脈は、彌彦火山脈とて、男鹿半島の寒風山に起り、越後の彌彦山、米山となり、妙高山にて富士火山脈に會す。

五、霧島火山脈は、臺灣島に始り、琉球列島を過ぎて、九州に入り、開聞嶽、櫻島、霧島山を起し、西北に折れて、溫泉嶽、多良嶽に至る。霧島山の北に阿蘇火山あり、阿蘇火山脈は此より出で、英彦山、九住嶽、由布嶽を崛起して、四國に入り、石鎚の嶮峯となり、更に本州を東進して、三河の鳳來寺山に止る。

阿蘇火山脈の北に、並行して、白山火山脈あり、中國の西端より、東に向ひ、三瓶山、大山、船上山等を起して、加賀に來り、大日嶽より白山に至る。立山火山脈は、其の東に近く、

走向南北に亘る、即、北は、信濃と兩越との境上より崛起して、大小兩蓮華山、立山、乘鞍嶽、御嶽、此に簇立せり。白山火山脈の北、日本海中を通じて、一長火山脈あり、隱岐火山脈とて、西は、九州五島より、平戸、壹岐、隱岐の諸島を包み、能登半島の北邊に觸れて、佐渡の金北山に終るものはなり。

かく、我が邦は火山に富める地にして、著名の火山、一百七十餘座あり、世に名山と稱ふるものは、最、此の火山に多く、山容の俊秀、風致の幽邃は、此の山の特色と稱すべし、我が邦の佳景に富める主因は、實に此に存す。又、溫泉の湧出すること多くして、浴客に便を與ふること大なりとす。平野、山丘、到る處にはびこる國なれば、到底大陸諸邦の四望際涯なき大平原に比肩すべき平野なし。されど

海濱、河岸の平地は、地味沃饒なれば、人集り、物給りて、大都をも形成せり、中に就きて最廣きは、利根川、荒川等の流域を占むる關東平野にして、武藏、下總、上總、上野、下野常陸を含み、三四十里の間に亘れり。灌溉洽く、交通易く、帝國の首府、こゝに在り。

次に、稍大いなるを列舉すれば、本州には、陸前、最上、越後、尾濃、畿内の平野あり、十州には、石狩、十勝の平野あり、四國に、阿波、讃岐、九州に、筑後川の平野あり、臺灣には、西方の廣野ありて、何れも、地肥え、穀豊かなり。

平野は、又山地に得べからざる利益を生ず、農工商共に此に盛んにすべく、交通の便は、平野に於て、最發達す。

水系 我が邦の地勢は、狹少、且、山多きの故に、大河を流

すの餘地なけれども、四面に海を環らせるをもち、水蒸氣は量極めて多く、従うて、降雨繁ければ、水流到處に回注す。凡河の方向は、山脈の方向によりて定る、分水山脈南北に亘れば、河水は、率、東西に下り、東西に亘れば、南北に下る、我邦の分水山脈は、多く、南北に連りたれば、東西に流るゝもの、最多し。

十州なる石狩川は、長さ一百六十七里、諸川の首位にあり、されども北米みししつびい河の巨流に比すれば、その十分一に過ぎず、大陸諸河の長、且、大に若かざるを推すべし。本州の信濃川之に次ぎて、流程百里に及べども、自餘の諸川は、百里に達せるものなし、その五十里以上なるは、北上、阿武隈、天鹽、利根、木曾、最上、天龍、射水、阿賀、十勝、神通、江

川の十數流なり。而も皆平野を潤し、舟楫を通ずるの利少からず、加之、川水、魚鱗を生ずるもの多く、又、飲用に供するもあり、其の急流、岩を裂き、若くは、飛泉高く懸るの絶景は他に求むべからざる所なり。

湖沼の大きいなるものも乏しけれど、琵琶湖は、周回六十里ありて、我が邦第一の大湖といふべく、霞が浦は、三十六里ありて、琵琶湖に次げり、他は皆遙かに小くて、十里以上のもの十數あるのみ。而も、其の捕魚、舟運等の功、遽かに河の下にあるべからず。殊に、河水の源を涵養するは、即この湖に負ふ所なり。

沿岸 我が邦の海岸は、出入甚た多くして、従つて甚た港灣に富めるがゆゑに、交通運輸に便なること、測り知る



日本海岸嶮崖之圖

べからず。この海岸線の延長は、實に、七千五百里、面積の二萬七千六十餘方里に比して、其の三方里六に對して海岸線一里に當る。歐洲諸邦といへども、此の比例に及ばざること遠く、海岸線の長さをもて、國の進歩の程を検すべしといふ説にも合ひて、吾人の等しく喜ぶべき事に屬す、唯、日本海の海岸には、往々、遠



太平洋沿岸の遠浅之圖

淺、若しくは斷崖ありて、天
與の海岸線を徒^たならしむ
る憾あり。太平洋沿岸の地
は、屈曲殊に多く、傾斜緩徐
にして、斷崖從うて少く、港
灣に富めること、日本海岸
と大に異なるところなり。

第三 氣候

溫度 我が國は、南北緯度
三十度の間に在り、乃、北は寒
帶に迫り、南は熱帶に入りた
れど、その影響を被^かひるは固

より一部にして、大部は溫帶中和の氣候たることを失は
ず、全年の平均溫度は、攝氏十二度に居れども、南北兩端に
於いて二十度位の差違を見ることあり、其餘の地も之
に準じて、多少の異同あり。

又、高地と低地との間には、氣候大に異なるものあり、山
脈の位置も、亦、そのよく風雨を左右するの故を以て、氣候
に影響し、海を距るの遠近は、亦、直に、夏の寒暖、冬の熱冷の
因となる。

風 風は冬より春に至る間、亞細亞大陸より西北風吹
き來り、夏より秋は、印度洋上に西南風の起る時にして、其
の餘波我を襲うて、南風、或は、東南風を送る、寒風と暖風と
は、右の原因によるなり。

雨 雨及び雪は、全國一般に、その量甚多く、殊に、雨は南部に、雪は、北部に多し、雨量の最多なるは、加能、越前地方、四國、九州の南部、臺灣の北部等にして、本州東北地方、十州の海岸、瀬戸内海地方等は、少量の地なり。

海流 氣候に關する他の一因は、海流なり。海流とは海中一定の位置に海水の流行することにて、多く、風、熱の力に原く。其の中に、暖流、寒流の別ありて、大洋中、諸處に在り、我邦の周圍には、此の二様の海流共に循環す。その暖流は黒潮とて、赤道の邊より起り、臺灣の東を北へ流れ、分れて二派となり、本流は、琉球の東より、四國、本州の南方を流る、その色、深藍なるをもて、黒潮と稱す、此の流は陸前の邊より東北に折れ、北米の方に向ふ、支流は、對馬海流と

て對馬海峽より日本海に入り、北方に流れ去る。

寒流は、北方冷海に起る、之に二あり、一は親潮とて、東察加の近海より、西南に流れて、十州の東南、本州の東岸を洗ひ、陸前の海にて黒潮に吞まる、一は來滿海流とて、疇哥斯科海より日本海に入り、西北岸を流る。

太平洋岸は、一分、黒潮の爲に暖かに、日本海岸も、亦、多少來滿海流の爲に冷かなり、海流の氣候に影響すること、他國にも、屢見る例なり。

第四 天 産

日本は、寒溫、熱三帶の氣候を兼ね、寒、暖兩海流を合せ有し、雨多く、風徧く、氣候多様なるがため、植物、動物の種類萬狀にして、米國を除くの外、我に若くもの、世界になし。

植物 臺灣、琉球、小笠原島及び九州南部には、熱帶性の植物、樟、榕樹、杪羅、蘇鐵、芭蕉、椰子、鳳梨、甘蔗等、甚茂り、九州四國、本州は、溫帶性の植物、梅、櫻、桃、李、松、杉、檜、樅、檜、檉、公孫樹、五穀、綿、楮、桑、麻、甘藷の類夥しく、十州、千島には、寒帶性なる榎、松、樺、五葉松、蘚苔の類多し。

動物 動物の區域は判然たらず、且、禽鳥、昆蟲の種類は無數なれど、異大の獸類に乏しきは、其の棲息すべき地なきに由る。牛、馬、猿、熊、狐、狼、臺灣の豹、水牛、千島の臘虎、海豹、膾炙獸の如きは、特産と稱すべし。魚族は、海國のこととて多種なり、北方なる鮭、鮭、鱒を始として、鯛、鯉、鮪、鱈、鰻、鰻、鰻の類、枚舉に勝へず。

礦物 礦物は富裕なりといふべからざれど、石炭、鐵銅、

金、銀、錫、鉛、硫黃、安質母、尼等、必須のものは大抵備はりて、甚しき不足を告げず。詳かなるは、次の生業の條を參看すべし。

第二章 生業

前章に説ける我が國の自然界に就きて、再、默想せよ、位置は、洋海の中に在りて、交通の便言ふに及ばず、氣候、寒暑の中を得、地味肥えて、草木、禽獸の蕃殖に宜しく、山水の美、此に粹りて、民、其の恵に依り、嘻嘻として、おのが業を樂む、即、地理自然の狀況に鑑て、人工を其の最利ある所に施し、國を益し己を潤さむとす、之を生業と稱す、其の種類數多に及ぶ。

第一 林業

我が國は、地勢上山林に富み、その面積全國の五分三を

占めたり、歐米諸國と雖、此の割合なるは得難く、我が日本を林業國といふも宜なり。山林の功は、管に、有用の材木を得て、家屋、器具、薪炭等に供するのみならず、之より諸種の副産物を利し、合せて、水源を涵養し、洪水を防止し、氣候を調へ、風致を添ふるなど、一として、重からざるはなし。かく緊要の樹林なれば、維新前までは、諸藩の監督、いと厳しく、最、保護に力めたりしを、近世、濫りに、伐採するもの多く、其の弊害、著かりければ、今は嚴に制を立て、保護蕃殖のことを勵めり。

山林は、御料林、官林、民林の三種に別つ。その中、特に、著名なるは、信濃の木曾を推すべく、其の檜、杉、櫟、榎、松を合せて、木曾五木と稱す。伊豆、紀伊、大和、奥羽の山林、又、之に次

けり

第二 牧 畜

土地を利用するの途は一ならずれば、地味、農穀に適せざるの地は、森林に充つべく、其の平坦なるは、牧畜に充つべし。されど、牧畜の業は、未、發達せず、外國と比肩するに足らざるなり。牛馬は、從來、運搬耕耘の上に重せられ、今日にては、其數牛、一百二十五萬頭馬、一百五十五萬頭あり、牛は中國、四國以南に多く、馬は九州南部、及び、奥羽以北に多し。此の外、豚は鹿兒島、沖繩縣等に飼養せられ、羊、鶏も、牧畜の一に數へらる。

第三 水 産

我が國は海國にして、地勢、魚類の棲息に好適なれば、巨細の魚族、海藻、簇り棲み、水産の業は、國の一大富源を成し、一年の産額六千萬圓に達す、實に、世界中、第三位の水産國たり。

中にも、北海道は、北米加奈太の東岸、歐洲那威の西岸と合せて、世界の三大漁場と稱せられ、鮭、鯉、昆布、鱒、鰯を始めとして、臘虎、鰐、鰐、鰐、海豹等の海獸を加へ、凡、全國産額の四分の一に及ぶ。

千葉縣九十九里濱の鰻、土佐の鰻等、一地方の名産を擧ぐれば、際なく、日常吾人が食膳に上るもののみにても、大數を占むべし。蓋、水産物の功用たる、直に食に供するは

更なり、鹽物、乾物とし、肥料、雜用品として、何れも重要な物産を成す。

鹽は、大抵海水より製出す、我が瀬戸内海には、降雨少く海水鹽分を含むこと多きを以て、其の沿岸の諸處は、製鹽の業甚盛にして、十州鹽田の稱あり、山口、香川、兵庫、廣島等の諸縣は、一百萬石より、五十萬石以上を産出す。

第四 農業

我が國は、古來農を以て國の本と定めてより、他の諸業にも超えて、獨よく發達したるは此の生業なり、されど、全國の耕地は、約五百萬町にて、甚廣しといふ可らず、全國面積に比して、尙、小きを憂ふるが故、更に、開拓の功を致さざ

るべからず。この耕地より收むる產物は、米、麥、大小豆、粟、蕎麥、玉蜀黍等の穀物、甘藷、馬鈴薯等の蔬菜、藍、綿、麻、蘭、楮、漆、雲蓼、甘蔗、茶、烟草等の工藝若は、飲用品、及び、菓實等様様あり。

米は、年年四千七百萬石を穫、新潟縣の二百七八十萬石を最として、兵庫縣之に次ぎ、一百萬石以上を穫るもの、二十縣あり。麥の收穫は一年二千萬石あり、埼玉、茨城、兵庫、熊本の諸縣を多產地とす。此の二穀は國人の常食に供し、釀酒に用ゐる或は外國に輸出す。

養蠶に適する國は、宇内に數多からず、支那を最として、外に、伊太利、日本、佛蘭西などあるのみ、我が國にては、長野、群馬、埼玉、福島、岐阜の五縣は、蠶業の最盛大を致せるもの

なり。

第五 礦業

我が國土は、諸種の地質の錯雜せるをもて、礦物の種類は殆兼有せり。別けて石炭、銅、銀、金の四礦は豊富にて、全礦産の十分九半を占めたり。石炭は、福岡縣最多く、十州、佐賀、長崎、之に次ぎ、銅は、栃木を首として、秋田、愛媛、之に次ぎ、銀は、秋田、岐阜、兵庫、金は、鹿兒島、新潟を推す。我が國、亦鐵を藏すること、決して少きにあらす、未調査を經ざるを以て、採掘甚振はざるのみ、彼の岩手縣の如きは、巨大の鐵礦を有し、大に人意を強うするものあり、蓋、石炭、鐵の二礦は、直に、工業を助くるものなれば、二礦の多きは、工業の盛



んなる所以にして、國の富強を招く基礎たり、英、米二國、工業の進歩著きも、亦此に由る。我が國、幸ひに二尾、銅、彼が後に在るべからず。山之、右の外硫黃、安質、母尼、陶之、土、石油等を産し、大抵、良品の譽を得たり。以上諸礦の年産價額、凡、四千萬圓とす。

第六 工業

以上の諸生業にて得たる物品を原料とし、之に人工を加ふるを工業と呼ぶ。されば小は一人の手工に成り、大は、大機械の働に依るも、皆是、工業の一類なり。我が國人は、美術の嗜好深く、天性、意匠に富み、又、他の長所を採るに敏きを以て、工業日に盛んなりしに、今は又、諸種の機關の助を假りて、技術愈進み、遂に、東洋の美術國と貴はれて、日本工藝の名、天下に遍し。

蠶糸を産する國は、世界に稀なること、養蠶の條に説きたり、我が國の生絲は、既に世界に好評を博し、外國輸出品中、第一位に居りて、年年四五千萬圓の輸出額あり。綿絲紡績の盛んなるは、大阪、岡山を主とす、是亦輸出額

の大きいなるものなり。

織物には、絹織、絹綿交織、綿織、麻織、毛織の類あり。産出の多きは、京都を第一とし、群馬、愛知、福井、埼玉、栃木等の諸縣之に次ぎ、總産額、二億萬圓に上る。

漆器の製出は、和歌山第一たり、神奈川、静岡、石川、京都、之に次ぎ、陶磁器は愛知を第一とし、岐阜、佐賀、京都、石川、之に次ぐ。漆器、陶磁器は、多く、我が國の特産物に係り、甚く外人の嗜好に投じたり。

摺付木は、兵庫、大阪にて盛んに製造し、汎く諸方に輸出す。酒、醬油の製造、亦、甚、盛大にして、兵庫の酒、千葉の醬油は、其の特産とも稱すべし。其の他、砂糖、紙、皮革、諸器具の類、一一に掲げ盡すべからず。

第七 商業

商業には、内國商業と、外國貿易とあり、内國の商業は、古來、むねと勵みし所なれど、近時、商業の諸機關具はるに至りてより、長足の進歩を遂げ、嘗に、都府の地のみならず、僻地と雖、物貨の集散繁くして、商業市の興るもの相踵けり。商業の機關とは、商業會議所、取引所、銀行、會社等を稱し、諸種の交通機關は、やがて、亦、商業機關たるべきものなり。外國貿易にては、未開國は、常に、開明國に利せらるるを免れず、この競争に勝を制せむには、益、殖産の道を講じ、國の富強ならむを謀らざる可らず。我が外國貿易は、從前、徳川氏鎖國の政略に阻てられ、漸く近時の勃興に係る

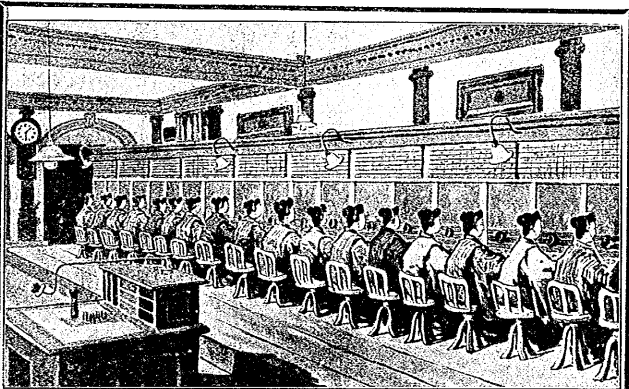
といへど、既に異常の發達を經、之を、今より十年前の形勢と比べなば、其の差の著きに驚かざるを得じ。現時の輸出品價格は、二億一千五百萬圓、輸入品價格は、三億一百萬圓の巨額に達したり、輸出品の主要なるは、生絲、綿絲、石炭、羽二重、銅、茶等にて、輸入品は、棉花、砂糖、石油、金巾、鐵等なり。貿易には、貿易港あり、其の數すべて、二十八、中に、横濱、神戸の二港は、霸を稱するものにて、他の二十六港に於ける貿易總額の、殆、四倍に近し、長崎、大阪、門司、下の關等之に次ぐ。

又、我と最も盛んに貿易する國を、順次に擧ぐれば、北米合衆國は、唯一の花客たり、次は支那、英國、及び、其の屬領次は、佛、獨、朝鮮等を主要の國とす。

第八 交通

交通の發達は、即、國運の發達なり、物貨を山と積むとも交通開けずは、徒に寶を藏するに等し、人は交通に依りて見聞を弘め、地は交通に依りて價值を増す理にて、人世の大事、此の上はなからむ。此の故に、文明國は交通の爲に、あらゆる設備を全うせむとし、先、道路を開き、橋梁を架け、汽船を行き、汽車を駛せ、郵便を設け、電信を通はせ、かくて人は、世界の廣さを忘るるやうになりぬ。

日本は後進の國なれど、善きを探るには、一瞬を猶豫せず、交通の設備も、着々目的を遂げ、今は敢て他に耻ぢざるの成績あり。



電話交換局之圖

道路は三等の別ありて、國道縣道里道と分れたり。鐵道は、主なる都府には、大抵敷かれ、尙、年を期して、普く之を通せむとせり、其の既設の總延長は約四千里に達し、官設線民設線の別あり、鐵道の關する所は、極めて弘ければ、其の設備は十分完全なるべきを、諸外國に比べて、我の劣れること多きは遺憾にして、益

改良に力めずばあるべからず。航海には汽船ありて、日本郵船會社、大阪商船會社等の會社、又は個人に屬し、内外諸港の間に往復せり、日本は、海國なれば、海運の事は一日も忽にするを得ず。郵便、電信の如きは、共に大に整備し、電信線の長は、一萬九千里に及び、海底にも、敷設して、海外と音信す。此の外、近來、電話行はれ、主要の都市間に、其の信線を架け渡せり。

第三章 住民

第一 種族及び人口

種族 日本人といふ中にも、凡、四種族は混じたり。本州、四國、及び九州には、大和種族とて、我が人口の多數に居り、最優等なるものあり、北海道の土人に、あいぬ種族あり、臺灣には、支那より移住せし支那人と、馬來群島より轉居せし蕃人とあり、各氣質風俗に多少の異なる所あれども、日本帝國の臣民たるに於いては一なり。

人口 右の諸種の人口、大和種族は、四千四百萬、あいぬ種族一萬五千、臺灣の支那人二百七十萬、同蕃人十二萬、合計四千六百萬を超え、世界中、人口の多き、第七に位せり。

今大和種の人口を、其の住する土地の面積に對して、平均に割り充つれば、一方里の内に二千數百人を容るゝことゝなり、稠密の度合は、英吉利、伊太利などにも劣らず。

第二 教育及び宗教

教育 世運の、教育の進退によりて、變動すること、形の影響に於けるに異ならず、維新の後、教育の制、俄かに整ひしに外交開けてより、泰西の文物、滔滔として流れ入りしかば、東西の學問を融和して、茲に、日本の新教育は興り、今日目ざましき進歩を見る。

學校は教育の源にして、大小合すれば、二萬八千校、生徒五百二十萬人あり、其の中、小學校は二萬七千、中學校二百、

師範學校四十七なり、共に全國に普及して、國に不學の徒なからしめんとす。

學校教育の外、諸方に圖書館を開きて、衆庶の觀覽に便にし、又、圖書、雜誌、新聞の出版盛んなれば、容易に、智識は播布せらる、是、亦、教育の好き方便なり。

凡、宇内に教育の最振張せるは、獨逸に如くはなく、我に、唯二ある大學は、彼に、二十餘あるにても知るべし、吾等は、之を羨むのみならず、必ず、之を凌駕せむことを怠るべからず。

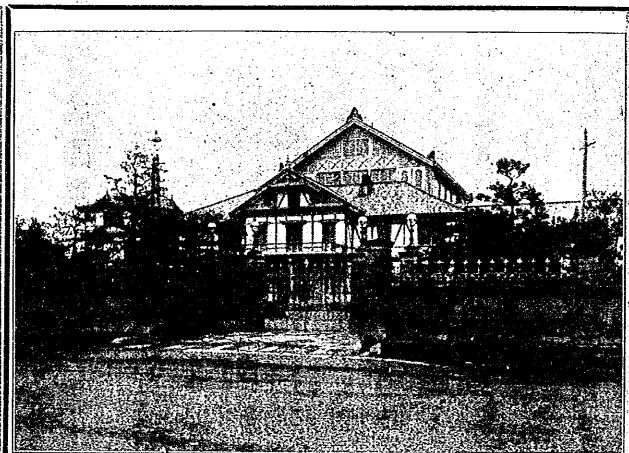
宗教 人は、信仰を定めて、精神を修練し、安慰を求めむの念を發すること屢なり、是に於いて、宗教あり、我が國人は、古來、諸の神祇を尊ぶの風ありければ、後、之を、神道と

て、一派の教とし、神社諸國に普し。然るに、支那の儒教、印度の佛教、渡來することありてより、之に歸すること亦厚く、殊に、佛教信徒最多く、其の宗派、十數に分れ、寺院、全國に散布せり。以上の三教は、今日、互に混するを咎めざれど、別に、一教の前者と相容れざるあり、基督教、是なり、此は渡來日淺く、未盛んなるに至らず、されど、世界に流行すること、最廣きは、この教にして、佛教は其の次位に在り。

第四章 政治

第一 元首、立法、行政、司法、及び、外交

元首 我が國開闢してより、二千五百有餘年の間、萬世一系の至尊なる皇室上にあり、之を我が國の元首として、代代の、臣民の等しく、奉ずる所なり。然るに我が叡聖文武なる 今上天皇陛下は、國體に則り、時勢に鑑み、國家の大計を定め給はむの大御心より、明治二十三年に憲法を發布せさせ給へり、こは萬法の據るところにして、國家の基礎、益堅かるべき所以なり。されば、我が國體は君主國にして、政體は立憲なれば、英吉利などゝ趣を同じうせり。かくて、天皇は、立法、行政、司法の三權、即、國家の統治權を



總攬し、憲法に依りて、之を實行し給ふなり。

立法 立法の事は帝

衆國議會を召集して、之を

議せしめ給ふ、議會は貴

族院衆議院の二より成

る。

行政 法律此に定め

は、之を行ふに、諸の官省

官吏を置く、行政部、即、是

にして、外務、内務、大藏、陸

軍、海軍、司法、文部、農商務

遞信の九省あり、之に各大臣あり、相集りて、内閣を組織し、内閣總理大臣之を率ふ。其の下に、各地方廳あり、三府、四十三縣には、知事を置き、府縣の下に、郡、市、町、村の區劃ありて、之にも、皆、長あり、北海道と臺灣とは、別に北海道廳、及び、臺灣總督府を置きて、管内を統べしむ。市、町、村には、自治制を施き、獨自、政務を處理せり。

此の外帝室の御内事に與る宮内省、天皇の至高顧問府たる樞密院等特別の官署もあり。

司法 司法部、即、裁判所は、天皇の御名にて、法律に依り、司法權を執行す。其の法庭に、大審院、控訴院、地方裁判所、區裁判所の四等の別あり、大審院は、東京に置かれ、最高位に在りて、七個の控訴院は、之に屬せり、地方裁判所、區裁判

所亦、各其の下にありて、各府縣に置かる。されば、下級の裁判所の判決に服せざるものは、更に、上級の裁判所に上訴することを得。

外交 國運外に發揚し、國際事多きに及べば、外交の事は、極めて重要となる。嘉永六年、北米合衆國の使節ペリイ來朝し、其の國と條約を結びたるを始めとして、通商貿易のため、交通條約を卒へたる外國は、二十二箇ありて、歐羅巴、南、北亞米利加、亞細亞、亞非利加の五洲に亘り、世界著名の國は、大抵、其の中に網羅せられたり、是等の國には、公使、領事を派して、彼我の意を通じ、又、其の居留人民を保護するの責に任ず。

第二 兵備

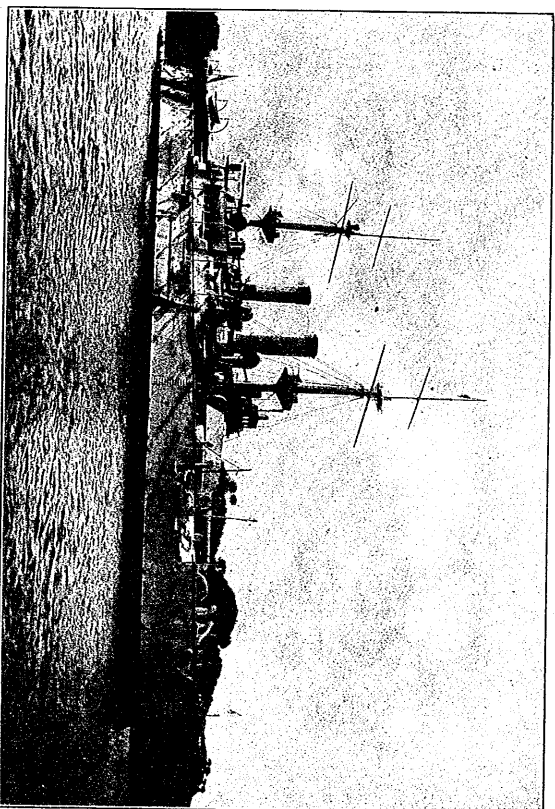
我が軍隊は、天皇陛下の統率し給ふ所にして、分ちて陸軍及び海軍とす。帝國の臣民にて、男子たるものは、其の不具、癘疾なる者の外は、皆、悉、兵役に服すべき義務あり、これ實に、納税の義務と共に、我が國民の二大義務たり。

滿二十歳にて徴兵となり、陸軍は三年、海軍は四年、現役に服し、期滿つれば、陸軍は四年四箇月、海軍は三年、豫備役に服す、以上の現役、豫備役を常備役とし、常備の後、尙五年、後備役に服す。別に補充役は、陸軍にては、七年五箇月のものと、一年四箇月のものと、二に分れ、海軍にては、一箇年なり。國民役は、以上の諸役を終へたるものと、服役せざるものと、之に服するの制なり。

此の軍人は、陸軍に三十四萬人、海軍に二萬五千人あり、之を諸外國の兵員に較ぶるに、その少きこと驚くべしといへども、我が軍人は、奉公の一念半として、勇猛の比なきは、古語の一人當千といふに差はず、勇しきかな。

陸軍 全國を十三師管に分ち、更に、五十二聯隊區に分つ、近衛師團は、東京に在りて、皇室を護衛し、第一より第十二までの師團は、順次に、東京、仙臺、名古屋、大阪、廣島、熊本、旭川、弘前、金澤、姫路、丸龜、小倉に其の司令部を置きて、各、其の師管を統べ、臺灣は、混成三箇旅團を置きて、守備とせり。陸軍兵の種類は、歩、騎、砲、工、輜重の五あり、別に、憲兵ありて、軍事上警察のことを司る。

海軍 全國の沿岸を五の海軍區に分つ、猶陸軍に師管



帝國海軍八島之圖

あるが如し、各海軍區には、鎮守府ありて之を管し、其の所在を軍港と稱す。横須賀、吳、佐世保、舞鶴、室蘭即、是にて、我六十隻の大小軍艦、之に分屬せり。此の中、室蘭は未、開廳に至らず、又上記の軍艦中、眞に有力なる戰闘艦、及び、巡洋艦は、合計三十隻にして、世界中、第七位に居り、他の諸強國英、佛、露、獨、米、伊の如きは、皆、我より數倍の多きを有せり。

第三 區劃

古昔、行政に便ならむがために、全國を畿、及び、道に大別し、更に國に小分し、今も一畿、八道、八十五國の名稱あり。此の區別は、よく地勢に鑑みて設けしものなれば、地理を究むるに、知らずばあるべからず、之を道國別と稱す。

即、左の如し。

畿内 五 國 山城、大和、河内、和泉、攝津

東海道 十五 國 伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、甲

斐、伊豆、相模、武藏、安房、上總、下總、常陸

東山道 十三 國 近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥、羽前、羽後

北陸道 七 國 若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡

山陰道 八 國 丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、石見、隱

岐

山陽道 八 國 播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長

門

南海道 六 國 紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐

西海道 十二 國 筑前、筑後、豊前、豊後、肥前、肥後、日向、大

隅、薩摩、壹岐、對馬、琉球

北海道 十一 國 渡島、後志、石狩、天鹽、北見、膽振、日高、十

勝、釧路、根室、千島

臺灣は、新附の領國にして、道國の區劃に關せず。

今の行政上の區劃は、右のとは異にして、府縣別と稱し、全國を、三府、四十三縣、北海道廳、臺灣總督府に分つ。日本五大島の中、本州、四國、九州の三は、其の由來最古く、全國の中央を占めたるは、此の三島中なる三府、四十二縣を中域と總稱し、十州及び千島、即、北海道廳を北域、琉球及び臺灣を南域と總稱す。以下、地方誌を述ぶるには、此の三大別に從ひ、特に、中域は、更に、本州中區、本州北區、本州西區、四國

區、九州區の五に分ちて説きたり。

下編 處誌

一 中域

第一章 本州中區

本州は、日本諸島の中、面積最廣く、一萬四千五百方里あり、之に屬する島嶼亦多ければ、我が總面積の半以上あり。本州中區と稱するは、此の中央部を占め、此の中に、東京府と、埼玉、千葉、茨城、栃木、群馬、長野、神奈川、山梨、静岡、愛知、三重、岐阜、滋賀、福井、石川、富山の十六縣あり。

中央は、樺太、崑崙山系の交叉し、富士火山脈の貫通する處なれば、山脈群集し、地勢峻險を極めて、國中無比の高地を成す、即、鈴鹿山脈、紀伊山脈を以て西境を限り、筑波、足尾

三國の諸山脈東境に並び、關東赤石、木曾、飛驒、濃飛、寶達^{すだち}の諸山脈に加ふるに、富士、立山の二火山脈ありて、簇然蟠屈せり。されば、本州の此の部分は、幅最廣き處ゆゑ、山嶽の蟠集甚しけれど、平野は、決して少からず、關東、尾濃等の大平野ありて、利根、木曾の大河各、此に灌漑し、地味の豐沃を極む。

本州中區の沿岸は、出入殊に甚しく、其の日本海の方面は、能登、若狹の一部に止れども、太平洋方面は、房總、伊豆、三尾の諸半島斗出して、數多の港灣を抱き、交通の便を資くること、測り知るべからず。

氣候は、概ね適度にして、殊に、太平洋岸は、日本海岸に比すれば、寒暑の差微にして、雨量も少く、天氣和澄なり。内

地の山間には、年中雪を頂けるものありて、大いに寒さを増す。

第一 東京府

管轄 武藏南部 豆南諸島

東京市は、武藏平野の東南、東京灣に臨み、隅田川に跨れり。東西三里、南北四里が間に、一百四十萬の人口を容れ我が皇居ここにありて、日本の首都、東洋文明の中心たり。市内を十五五に分ち、宮城は、其の中央の麴町區にあり、陛下の威徳と共に、萬邦の等しく、崇拜する所なり。およそ、全國の政治、學藝、商工、風俗は、いづれも此の地を宗とせざるなきを以て、官省、學校、會社、商賈、一として整備せ

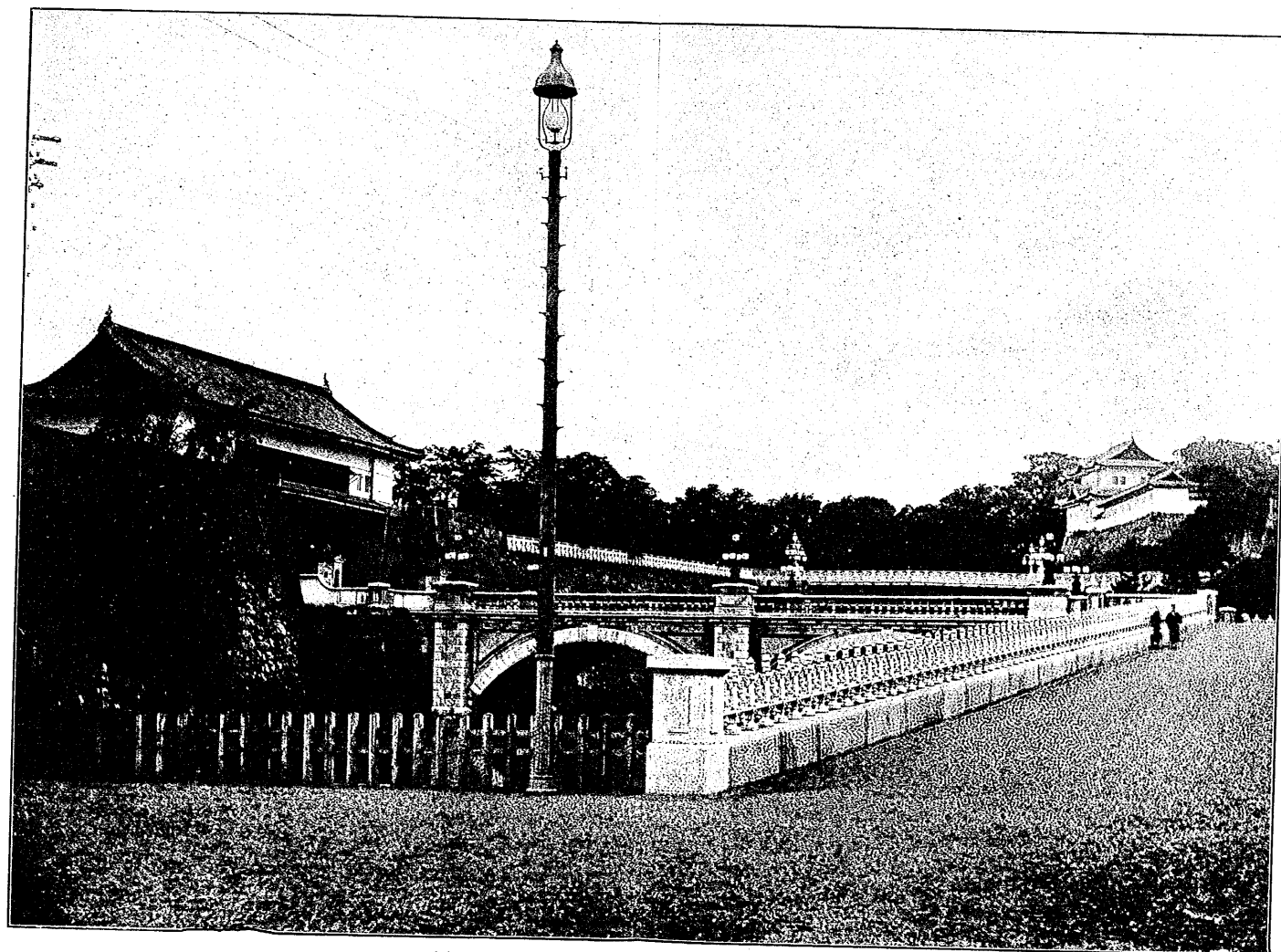
不忍ノ池



銀座通



ざるはなし。東京府廳、近衛師團及び第一師團司令部、此に在り、公園は、上野、淺草、芝、若は四時の花月に名を知られし名所は、一々數ふべからず。交通上、又、日本東半の衝に當れるを以て、電線は空に蜘蛛の巣を張り、鐵道馬車、街衢を貫き、汽車の停車場は、新橋、上野、飯田町、本所、其の他市中に

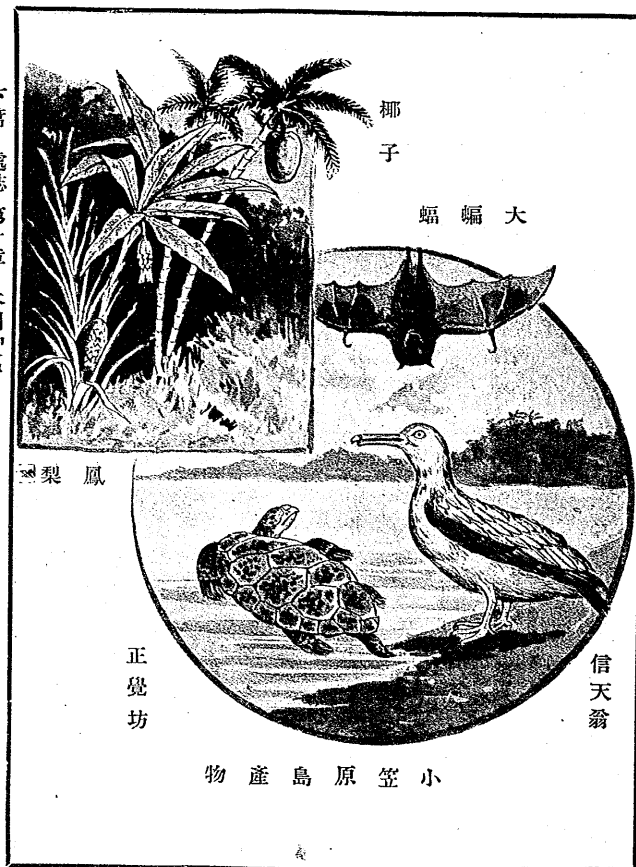


宮城二重橋之圖

數所ありて、四通八達せり。當地の產物には、錦繪、淺草海苔、袋物、團扇及び、美術工藝品多し。かく熱鬧の地なれど、昔は、一望、草漫々たる原野にして、月の入るべき山もなして、ふ古歌の意の如くなりしが、太田道灌、城を此に築き、次ぎて家康、霸府の地と定めし以來、面目頓に改り、江戸の繁昌は、徳川氏三百年の間に漸く固まり、明治の初年遂に永く輦轂を停め給ふに至れり。

甲武鐵道は、即、市内飯田町より起る線路にして、直に西に走り、櫻花の名區たる、小金井の南を過ぎ、八王子を経て、甲斐に入る。他日、甲斐、信濃、美濃を貫きて、尾張名古屋に通ずる、官設中央鐵道とならむとするものなり。八王子は蠶業地にして、八丈市、樂織等を出し、其の北、青梅鐵道の通

せる青梅には、綿の産出あり、尙北方狭山の茶は、亦殊に名高し。八王子の西方より、多摩川流れ出づ、川は鮎を以て名あり、又、東京市民の飲用水として、水道もて、導かるゝものなり、下流は六六川となり、東京府と、神奈川縣との境を分ち、其近傍に南朝の義臣、新田義興を祀れる社祠あり。東京の南に接して品川あり、古、五十三驛の發程とせし地にして、新橋發の汽車之を過ぎる、此の鐵道を東海道線と稱し、東海道を西に走りて、攝津の神戸に至る。東京灣を出づれば、伊豆の海上に島嶼數多連列するもの、之を豆南諸島と稱し、皆、富士火山脈中の火山島にして、數群に分る。最近き伊豆七島中の大島には、三原山ありて、噴煙、伊豆より望むべし。八丈島は、稍、南に離れ、八丈絹



の産を以て世に知らる。小笠原諸島は、更に南に位し、氣候熱く、蝸龜しやうかく、信天翁しんてんゆう、大蝙蝠の如き、或は椰子、鳳梨、珈琲の如き、熱帯性の動植物あり。

第二 埼玉縣

管轄 武藏北部

東京の上野を發する鐵道を、東北鐵道に依りて北すれば、同じく武藏の内なる埼玉縣に入り、直に縣廳の所在地なる浦和町六千に至る。本縣は、東北利根、江戸の二川を境とし、西は、關東山脈中なる秩父群山を負へり。

浦和の北なる大宮に、日本鐵道の工場あり、此より西北に走るを、高崎線といひ、東北に走るを東北線といふ、此の

外東京の北千住より東北線に久喜に會する東武鐵道と、甲武鐵道の北して川越に到るものとあり。

大宮は、公園を以て知らる、其近傍に有名なる螢の產地あり。高崎線中の鴻の巢、熊谷亦名驛にして、鴻の巢の西方、吉見村に、上古土人のなしたる墳墓の蹟あり、熊谷は昔彼の直實が領したりし處とす。

荒川の中流に近き川越は、中央の名邑にて、絹布、及び甘藷の名産あり。本縣平野の地は、耕耘行きとゞきて、農産に富み、就中、麥の産額は、全國第一位に在り、又、二子縞など、木綿織はいふに及ばず、秩父地方は、所謂秩父絹の名ある處にて、養蠶業いと盛なり。

第三 千葉縣

管轄 安房 上總 下總大部

東京本所の停車場を發し、東行一時間にして、下總國千葉町に達す、此の鐵道は、總武鐵道とて、東京より、此の國の東端、銚子に到るものなり。此の支線には千葉にて右折し房總鐵道とて、上總の一の宮を経て、その東岸を廻るものあり、又、佐倉にて左折し、成田鐵道とて、成田を経て、北境に近き佐原に至るものもあり。

本縣の管轄は、三國に亘り、南二國は、房總半島と總稱せられ、山地にて覆はるれども、上總の北より下總を兼ねてすべて、是れ一望平野の限りを知らず、習志野、小金が原の如き、其の一部なり。利根川は、北、上野に發し、北境を横流

して、銚子口に注ぐ、阪東一の大河なればとて、世俗阪東太郎と稱す。四近平野の地味肥えたるは、主に本流の賜なり、又、印旛沼、手賀沼などの湖あり。農産の額多し。

東京府との境なる、江戸川の左岸に名産を有する諸邑あり、野田醬油、流山の味淋、行徳の食鹽等是なり。千葉町人口二は、縣廳の所在地にして、宦衙、學校、社寺等並び立てり。佐倉は印旛沼に接し、第一師團の分營のある所、又佐倉炭の名に知らる。其の北、成田に新勝寺の不動尊あり。佐原は名邑にして、近く香取神宮の名蹟を控ふ。銚子は、野田と並びて醬造の産地なるが上、銚子縮布の名産をも出す。

上總の東岸は、下總の銚子に至るまでを包んで、九十九



獵 漁 里 九 十 九

里濱といふ、鱈の漁無比の盛況を致し、四方に輸送すること夥し、其の他全縣を通じて、鮪、鯛、鰭等魚族の利測るべからず。此南端なる一の宮は、近來海水浴客の訪ふ者増しぬ。東京灣方面に、木更津ありて、東京と船を通じ、其の西なる富津洲には、對岸、相模の觀音崎と共に、砲臺を設けて、東京

灣口を守れり。

上總と、安房との境に、清澄山あり、其の東南海岸の小湊と共に、日蓮上人の迹たり。西岸に北條館山の二町、相接して、東京と通航し、夏時都人の來遊するもの多し。

第四 茨城縣

管轄 下總西北小部 常陸

東京を發する日本鐵道の水戸線は、千葉縣の西北を貫きて、常陸に入り、筑波山と霞が浦との間を過ぎて、水戸に達す、此の線は、尙北に延びて、仙臺近く進む。

此の線に沿ひて、土浦、石岡の二邑あり、共に醬油を醸造し、石岡酒、亦聞ゆ。この東に霞が浦あり、我が國第二の大

湖にて、形、珊瑚の如し、利根川を以て太平洋と連り、魚蝦多く産す、湖東、鹿島町に、鹿島神宮あり、下總の香取神宮と共に、名高き社なり。

水戸市人口三萬三千は、舊徳川氏親藩の地、紀伊、尾張と合せて、御三家と稱せられ、今は縣廳の所在地なり、市に偕樂園あり、日本三公園の一に數へらる、市の北を流るゝ那珂川の海に入る處、砂濱連りて、海水浴場あり、漁場あり、一遊すべき勝地なり。尙北して久慈川を渡り、常磐線路の縣境を過ぐる處に、源義家が、風流の迹をとゞめし、勿來の關の趾あり。太田は蒟蒻の産地にて、亦、水戸より汽車を通ず。

水戸より西は、日本鐵道の小山線、下野の小山に到り、其の間、下總の結城を過ぐ、此處は、紬に名ある處にして、且、其

の西南なる古河と共に、史上に名を傳ふること古し。

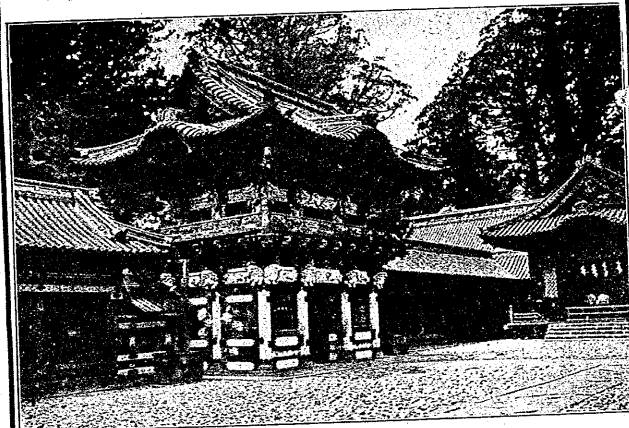
本縣の大部は、關東平野の中に於いて、麥、米、茶等多く、又、山に石材、川に魚族の産も尠からず。殊に、氣候の良好なるは、全國中一二と稱せらる。

第五 栃木縣

管轄 下野

水戸より來れる小山線にて、小山に來れば、鐵道十字形を成すを見む、其の南より來れるは、東北線にして、宇都宮を過ぎて、磐城に入り、西よりするものは、兩毛線と稱し、上野に入る。

宇都宮市六萬三千は、中央より稍南に位し、縣廳あり、千瓢の



日光明門之圖

産あり、夏季、日光旅客の過る者、大に地を賑す。此處より、東北に向ひ、麻の産地、鹿沼を経て、日光に達せる日光鐵道あり。日光は東照宮殿の壯麗、天下に比希なるを以て、名遠近に響き、日光を見ずば結構をいふなてふ俚諺あるも偽ならず、その山中、華嚴の瀑、中禪寺湖等の勝景集り、内外人

の就きて遊ぶもの數ふべからず、漆器、羊羹は名物なり。日光の西南に足尾あり、是、日本第一の銅山にして、由來も舊く、年額二百四十萬圓に及ぶ、渡良瀬川、此に發源し、上野を經、利根川に會す、附近の田園は、その鑛毒に害せらるゝことありとぞ。宇都宮の東南眞岡に、木綿の宜しきあり。兩毛線に沿ひて、栃木、佐野、足利の諸邑あり、足利絹は足利より出で、本縣蠶業の榮を示せり。本縣は、南方稍平地をなし、那珂鬼怒の二流、南下して土地を養へど、中央火山脈に屬する日光山彙などの火山多し、那須鹽原など著名の溫泉多きも是が爲なり。

第六 群馬縣

管轄 上野

兩毛線に依りて、前橋を過ぎ、高崎に到れば、鐵道又もや十字に交る、一は東京より埼玉縣を貫きて來れる高崎線一は、高崎より下仁田に至る上野鐵道、一は、高崎より信濃を経て、越後に通ずる官設信越線なり。

高崎はかくて、交通の要路に當り、第一師團の分營あり、又製絲の業盛なり。前橋市三萬は、縣廳あり、生絲の市場として名高し。其の東桐生は絹織を以て關東に覇を稱し、伊勢崎亦銘仙を以て聞えたり。總じて、兩野の南方、兩毛線の附近は蠶業の盛を極むる地方にて、京都と伯仲し、上野鐵道に沿へる富岡の製絲場の如きは、宏大無類なり。



此の養蠶地は、專、南方平野の間に在り、平野は、即、利根川の流域に在るものにして、他に、山嶽重疊せり、中に妙義榛名、赤城は何れも火山質にして、之を上野の三山と稱し、山中の奇景人を驚すに足る、嘗て、妙是のみならず、信義濃の境なる淺間山を始として、火山の此邊に群立するは、中央火山脈と、富士火山脈との會所に當れば

にて、伊香保、草津など、高名の温泉多きも、これがためなり。
 信越鐵道は、西境碓氷峠の險阻を越ゆるに、あふと式といふによる、一異觀なり。淺間山の煙を望みつゝ、長野縣に入る。

第七 長野縣

管轄 信濃

此の縣の鐵道今は、信越線の長野を過ぎ、東北隅を掠めて走れるのみなれど、中央鐵道の成らむ曉には、中南部の諸方俄かに生氣を帶ぶべし。

信濃は、本州中央の大國にて、境域十國に連り、高山、大河の集れる處なり、即、東に富士火山脈及び、赤石山脈あり、西

に立山火山脈あり、中央には、木曾山脈ありて、地勢數斷せられ、其の峽谷より、川は出づ。千曲川、犀川は相會し、信濃川となりて、越後に入り、天龍川は、南遠江に、木曾川は、西南美濃に流れ入る。千曲、犀、二川の出であふ處に、川中島あり、甲越二將の戦ひし跡なり。

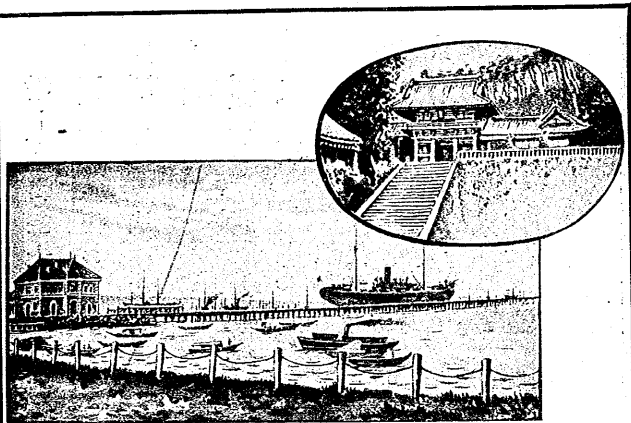
長野市^三はこの北にあり、縣廳の所在にして、市中、善光寺如來に詣づる者常に織るが如し、この四近、平地稍廣く、善光寺平の名あり。其の更科郡は、蕎麥に名高く、郡中、姥捨山に田毎の月を眺むべし。信越線に沿へる、上田は、紬の産をもて知られ、犀川の上流、松本町^三は、蠶業の中心にして、第一師團の分營を置かる。凡、此の縣下の諸方、養蠶の盛業大、日本に冠たり、繭を出すと、一年三十萬石を超ゆ。

松本の南鹽尻峠に登臨すれば、天龍川の源なる諏訪湖眼下に湛へて、冬は、人馬、湖面の結氷を踏んでかち渡りす。木曾の連山は、我が國第一の森林にて、殊に檜の良さを稱す、この山脈は花崗岩より成り、木曾川之を穿流して、寢覺の床が如き、奇景を生ぜり。西境立山火山脈中の御嶽は、諸國行者の登るもの相續けり。すべて山間の地は、漆楮を植うるもの多く、漆汁の多きこと、他に比なし。

第八 神奈川縣

管轄 武藏南部 相模

東京新橋停車場を發せば、直に、川崎に着す、この線路は横濱を經、相模を貫きて、駿河に入る。



鎌倉 入船宮 横濱 波止場

川崎は、大師堂ありて、賽人の爲に賑へり。横濱市は、昔は漁民の住する寒村なりしが、一たび港を開きてより俄かに、開港場中、最殷盛の地となり、我が貿易の大部は、此の港及び、神戸港の領する所となりし上、近時更に附近の地を市に合併し、築港亦將に竣らむとして、更に一層の繁昌

を増し、人口二十五萬を領して、三府に亞けり、東は米國、西は亞、歐に往復の船舶群り來りて、黒烟常に港口を覆へり、縣廳は此の地に在り。横濱の南には杉田、金澤等の名所あり。

相模の大船より、横須賀に達する鐵道あり、途次鎌倉を過ぐ、賴朝の幕府を此に開きしより、長く、集權の地となりたれば、多く史上の迹を留めたり、鶴が岡八幡宮、鎌倉の宮及び、鎌倉五山と稱せらるゝ建長、圓覺以下の佛寺、長谷の大佛等、枚舉すべからず。横須賀は、五軍港の一にして、我が國第一の造船所あり、此の邊を三浦半島と呼び、其の端なる浦賀は、我が國民の惰眠を醒しゝべりい提督の船を泊せし港にして、日本武尊の東征し給ひし時、妃、弟橘媛が、

尊の水難を救ひまゐらせむと、身を投じ給ひしは、是より東の海上なり。

鎌倉の西の海濱には、處々、史上に名たたる蹟ありて、江の島の斷岸に、波打寄する景色も尋常ならず。馬入川を渡り、國府津に入れば、鐵道、國道と分れて、西北に走る、鎌倉より、此の邊の海濱一帯、水浴に適し、風趣愛すべきを以て、避暑の客年々に増加せり。北の方、秦野には、煙草を出すこと多し。國道を行けば、小田原あり、北條早雲の據りし地、梅干の産、名あり。

此の國の東半部は、關東平野に屬すれど、西半は、山嶽連亘し、大山、足柄、箱根等、皆、名高し、大山に雨降神社あり、足柄は、西境に在りて、東海道線の通過する處、箱根は、其の南に

並び、有名なる七湯などの温泉あり、山上、芦の湖には、離宮立ち、名物挽物細工を製る。

第九 山梨縣

管轄 甲斐



猿橋之圖

中央線は、東京府八王子より西し、當縣上野原に通じ、期年にして、甲府に到らむとす、この甲州街道

を西に來れば猿橋の奇巧は、聞さしに増して驚かるべし。尙、進めば、笹子峠に至る、今鐵道の隧道を穿てり、此の北方連山中に、武田勝頼の亡びし、天目山あり、此の連山を境として、甲斐は東西二部に分れ、東部は郡内と號して、甲斐絹郡内縞の產地たり。

笹子の西に勝沼あり、甲州葡萄は、此より産するもの最多あり。甲府市六千に縣廳あり、信玄の城址は、其の北郊外に存す、

此の國は、南に富士の大嶽あり、東に秩父の諸峯、北に金峰山、八ヶ岳、西に駒が嶽等の山脈を圍繞して、甲府は纔かに其の谿谷に立てり、甲斐てふ國名も、山の間、の義に外ならず、交通の困難なること察すべし、この故に、富士川の急

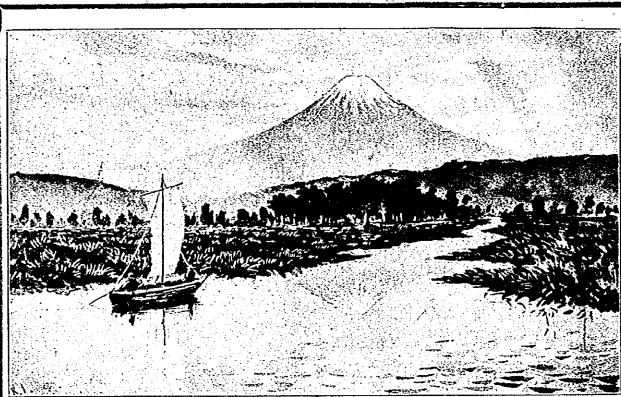
流を下りて、東海道に出づるもの少からず。されど、此の不幸は、物産の富裕なるを以て、償ふに餘あり、蠶業の盛んなるは更なり、西北諸山の金、水晶諸種の果實、三極の類は、何れも當地の特産にして、民を肥すこと、頗大なり。

富士川は、日本三急流の一なり、この川を下らむ者、舟を鰍澤に俵ひなは、十八里が間、半日ならずして、静岡縣の岩淵驛に着すべし、其の途上、身延山に久遠寺とて、日蓮宗の總本山あり。

第十 静岡縣

管轄 駿河 遠江 伊豆

駿河灣を抱ける三國を合して、静岡縣とす。



富士山之圖

富士山は、駿、甲二州に跨り、海面を抽くこと一萬二千尺、休火山にして、圓錐形を成し、山容の秀麗なる昔は、三國一と稱せしが、今は世界一とぞいふ、嶽上より、一眸十三州の壯觀いみじきものなり、南麓に愛鷹山あり、すべて富士の麓を裾野といひ、一大廣野を成せり、曾我兄弟が義憤をはらし、は、此處にして、今、多く、

三桎を植ゑて、駿河半紙の原料とす。富士川を下らば、この山の西麓を廻り、東海鐵道に沿へる、岩淵驛にて上陸すべし、この鐵道は、神奈川縣より來り、駿河の東方三島より分れて伊豆に入り、三島を経て大仁に向ふ豆相鐵道と連絡せり。

伊豆は國形、矢の根に酷似せり、富士火山脈南北に貫通するを以て、溫泉多く、熱海、修善寺等、著名なり、熱海は、相模の小田原との間に、人車鐵道を通せり。三島と修善寺との間に、韭山あり、伊勢長氏の起りし處にて、史上に名高し。其の中央に位する天城山は、良材多く、此の地方、又、伊豆石を出す。東南隅なる下田は、當國の良港にして、早く開けたり、近海鯉の漁に富み、伊豆節とて、質甚良し。南端石廊

崎は、遠江の御前崎と相向ひ、各燈臺を設けて駿河灣口に輝けり。

御殿場は關東より來る富士登山者の下車する驛にして、沼津は氣候溫和、風光明媚の地、西田子の浦へは、濱つゞきなり。富士川を横り、岩淵より薩埵峠の古戰場を経て、興津に至る、鯛の名を博せし地にて、清見寺、清見瀧はこゝにあり。江尻の南なる、清水は、開港場の一にして、濱、神間の航船、寄泊す、この南、長洲海に浮き出で、松翠に、砂白きを三保の松原とて、神代の傳説あり。久能山に家康を祀れる神社あり、山上より眺むれば、駿州の山海、悉く現れて居ながら、諸勝を領すべし。

静岡市四は縣廳の所在にして、又、第三師團の分營あり、

安部川に臨む、昔は府中、又駿府とて、家康の隠居せし處、東海道屈指の驛路たりしが、今も東海鐵道の要衝に位して、戸々賑ふ色あり、漆器、竹細工を産す。此に近き焼津は、日本武尊が靈劍もて、火を薙ぎ給ひし舊地なり。

駿遠の境に大井川あり、北方、赤石山脈中より流れ出づ、昔は蓮臺にて人を渡ししが、今は、世態變りて、汽車鐵橋を走れり、此の川の右岸地方に石油を採る地あり。掛川を過ぎて、又、天龍の大河あり、信濃より出で、遠江灘に注ぐ、中流の左岸に、秋葉山あり、火避の神を祀る。川を渡りて、濱松に着す、遠州一の都邑にて、北方には、三方が原の古戰場あり。三河國に近く、濱名湖あり、もと、淡水の湖なりしが、明應年中、地震のため、湖口破れ、海と通するに至りぬ、鐵

道は、恰、この上に架り、左右の眺望、又なく快し。

本縣産物の中、茶の産額は、我が國第一位に在り、之を輸出すること、頗、盛んなり。

第十一 愛知縣

管轄 三河 尾張

濱松より來れる東海道鐵道は、豊橋、岡崎、名古屋を経て、岐阜に通ず。

豊橋は平壤の戦に、功名を残し、第三師團第十八聯隊の屯する處なり、豊川鐵道、此より北に分れ、豊川稻荷を経て、三河の北方に通ず。その北に、長篠の古戰場、及び鳳來寺山の古刹ありしが、近年焼けたり。岡崎は、家康の居城

なりしを以て聞え、其地、矢矧川に沿ふ、この川の支流に大平川あり、前の豊川と、すべて三大川あるにより、三河の國とはいふ。この國の東に、赤石山脈あり、北に木曾山脈あり、後者よりは、花崗石を出す、南と西とは、沃野、尾張に連りて、木綿の産出著大なり。

尾張は、其の形、恰、蝌蚪の如し、所謂尾濃平野の中に位し、木曾川の諸支流、灌漑洽くして、地味豊沃を極め、尾張米、尾張大根の名産あり、又、氣候の佳良なる、全國無二と稱せらる、唯、隣國美濃と共に、震災地とて、人之を惧る。

東境大府よりは、武豊線分れて、知多半島なる武豊に達す、亦開港場なり。知多半島は、東、三河に渥美半島と、三河灣を抱き、西、伊勢と、伊勢海を挟む、半島には、酒、醬油の醸造

いたく行はる。

半島の頸部に、今川義元の滅びし、桶狭間あり、又、近く有

松、鳴海の二町ありて、絞染を産す。

熱田は、名古屋に接したる海灣

にして、草薙劔を奉祀せる神宮あり

は、一に宮とも稱せり。名古屋

市は平野の中央に位す、徳川三家

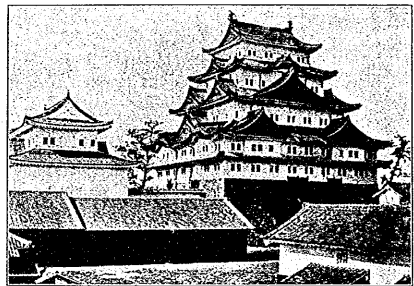
の一、尾張大納言の封地にして、其

の居城は、今、第三師團司令部とな

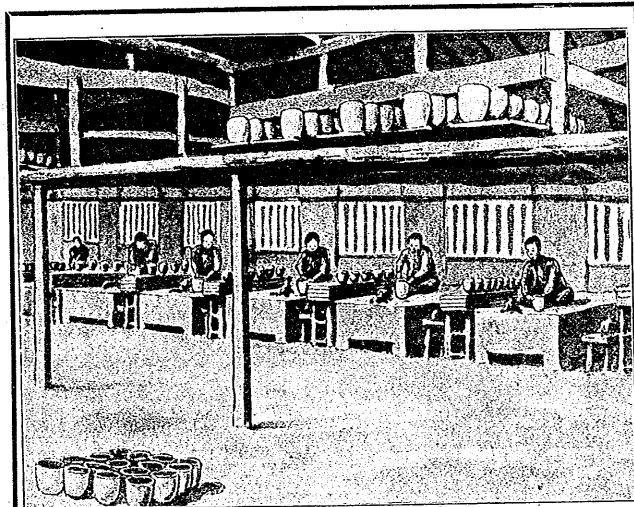
り、人口に膾炙せる金の鯨城、樓高

く輝けり、縣廳はこの地に在り、名古

屋扇、七寶燒の名博く、西北瀬戸よ



名古屋城之圖



陶器製造所之圖

り出づる陶器は、即
瀬戸物の稱を得て、
産出の多数なるこ
と、無比なり、蓋、此の
地は、兩京の間、隨一
の都府にして、南、熱
田を通じて、海にい
たり、鐵道は、東海線斜
に貫き、關西線三重縣
に入り、尾西線は津島
を連ね、中央線は美
濃の多治見に通せ

り、是を以て市況日に活氣を増し、人口、二十五萬に近から
むとして、將來、いと有望の地なり。
織田信長、豐臣秀吉は、共に當國の産なり、家康の三河に
産れたるを加へて、近古の三傑は、皆、愛知縣より出でたる
を知る、この邊に、戦場の迹多きも、理あるなり。

第十二 三重縣

管轄 伊勢 志摩 伊賀 紀伊小部

關西鐵道は、名古屋より出で、木曾川を過ぎ、伊勢の四日
市、龜山を経て、伊賀の上野を通じ、山城に入る、この間、伊賀
の柘植にて、近江草津に至る一線と、龜山より津に至る一
線とを分つ、後者は、更に、參宮線に接續して、宇治山田に達



伊勢大廟之圖

伊勢海濱は、平野連りて
伊勢米を産す、西南は、鈴鹿
紀伊の諸山脈跋扈せり。木
曾川の下流なる桑名は、古
來、米穀の取引行はれ、名物
時雨蛤及び萬古焼あり、四
日市は、開港場にして、横濱
等と往復の船を通はす。
津市二萬は縣廳の所在に
て、津鯢子を産す。その南
に、松阪縞に名を得たる松

阪あり、國學の宗にして、大和心を旭に匂ふ櫻花によそへ
し本居大人の生地なり。宮川を渡れば、山田に豐受大神
を祭れる外宮あり、宇治に、天照大神を奉祀せる内宮あ
り、この兩地を、今、宇治山田町と合稱し、大いに、參宮旅客の
ために賑へり。二見が浦、此に近し。

伊勢の東南端に、朝熊山を堺にて、志摩あり、海岸の出入、
犬牙の如く、鳥羽の良港あり。平地乏しき國なれば、漁業
盛んにして、石花菜、鹿角菜、伊勢蝦、真珠等あり。

伊賀は山國にして、木津川の上流、その間をめぐる。上
野は、一都邑にして、この河濱に在り、伊賀焼をこの地方の
名産とす

第十三 岐阜縣

管轄 美濃 飛驒

東海道線は、名古屋より來り、岐阜にて西に折れ、大垣を経て、近江に入る。

岐阜市三萬は縣廳の所在、其の稻葉山に信長の城址あり、本縣多く美濃紙を産するを以て、提燈、團扇等の製作、最盛なり、市の北

長良川の圖



を流るゝ長良川には、鵜飼てふ古風の漁法を用ゐて、鮎を捕ふること行はれ、奇觀なり。木曾川東より來り、この川及び、揖斐川等を合せ、巨流を成して南下す、揖斐川の流域に大垣あり、水害と震災とのために、居民の悩み一方ならず。大垣の西に、豊臣、徳川、天下分け目の戦せし關が原あり、西南に、孝子の物語に喧傳せる養老の瀧あり。國の東南、即、木曾川より、三尾の境に至る間の地は、陶器の産地にして、多治見は、鐵道名古屋より通じ、この業、いと盛大なり。木曾川の分流、飛驒川を溯れば、飛驒に入る。東信濃の境に立山火山脈、西に、白山火山脈あり、且、濃飛高原高峻を極めて、平地無し、されど、その山地は、銀、銅等の鑛産、裕かに又、養蠶を業とする者多し。高山は、唯一の都會にして、春

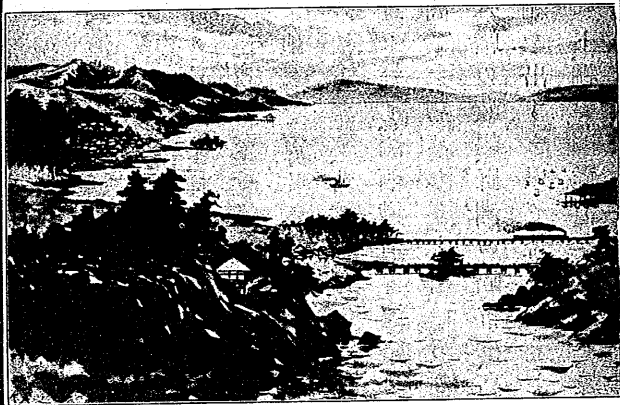
慶塗を産す。この國は、又、木材に富み、古來、名匠あまた出で、飛驒匠の名を博したり、位山の水松樹は有名なり。

第十四 滋賀縣

管轄 近江

東海道鐵道は、伊吹山を北に見て米原に來り、本線は、彦根、草津、及び、大津より京都に至り、敦賀支線は、北走して越前に入る。

右の二線を東縁として、日本一の琵琶湖は湛へたり、周回六十里に餘り、湖心に竹生島の如き勝地を泛べて、風光明媚、彼の近江八景の如きも、この湖の西南邊に散在するなり、湖中、夥多の魚介ありて、源五郎鮒など、尤著る、湖邊の



琵琶湖之圖

平野には、江洲米の良産あり。四境山を繞らし、中央に、この大凹地あるなれば、河流皆、此に流れ入り、湖水は、吐口を求めて、勢田川となり、末遂に淀川の名を得。都邑は、大抵鐵道に沿ひて、湖東に在り。大津市三萬は、西南の湖口に位し、縣廳及び、第四師團の分營あり、史に名高き

園城寺（おんじょうじ）は市の西に在り、三井寺と稱す、大津は關西、關東の過渡に居り、通路必之に依ること、古今同じ、されば、瀬田の如きは、東西の二軍相争ふ事ある時、常に決戦場となりき、此の地方、菜種の産夥しく、伊勢と並び稱せらる。草津より、伊賀に至る鐵道は、關西線に屬す、この鐵道の四方、信樂に地名を冠せる、茶と陶器とを出す。彦根は、嘗て井伊氏の治下たり、舊城址存す、近江鐵道は、此より出で、八日市、日野を経て、關西鐵道と連絡せり。日野は、八幡（やまはた）と共に、古來商業に巧みなりと稱せらるゝ、近江商人の出づる地なり、八幡の蚊帳、野洲の晒布は、高名の産物たり。長濱は、濱縮緬を出すを以て著る。是より北は賤が岳の古戦場を左にし、柳が瀬隧道を潜りて、越前敦賀に行く。

第十五 福井縣

管轄 越前 若狹

敦賀より北陸鐵道起り、武生、福井を経て加賀に入る。

敦賀の西、若狹は、海岸の出入著く、中に、小濱港を擁す、若狹塗の産地たり、すべて、此の國、漁業の利大にして、鯛、鰯の類、甚、名を博せり。

敦賀は、海水深く、灣入し、北陸に一二を争ふ開港場たり、又、第九師團の分營あり、町の北、金が崎宮は、南朝の遺跡なり。鯖江（さばえ）にも、亦、同師團の分營あり。

日野、足羽、九頭龍の三川、西南、白山火山脈中より出で、相合する處に、福井市（ふくいし）四萬あり、松平氏の治下たりし處にて、

縣廳の所在地なり、市端足羽山に、新田義貞を祭りたり、この外當國には、新田氏の迹多し、羽二重、奉書紬、絹手巾など、絹織の産額は、京都に亞ぎ、輸出を專とす。諸國に聞え高き永平寺は、曹洞宗の本山にして、市の東、數里に在り。三國は、名ある港にして、日野川の口に位す。福井の正西に當る海には、越前雲丹の名産ありて、酒客に喜ばる。福井以南の諸郡、良好無比の紙を産する地あり、奉書、鳥子の如きは是なり。

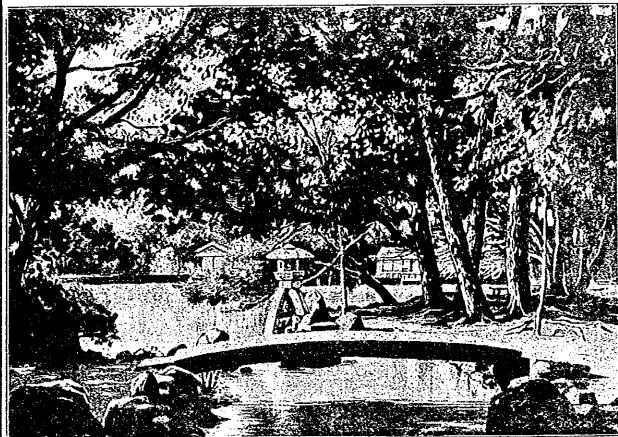
第十六 石川縣

管轄 加賀 能登

越前より來れる北陸線は、大聖寺、小松を経て金澤に至

り、津幡にて二分し、本線は、越中に入り、支線は、能登の七尾に達す、之を七尾鐵道といふ。

加賀の東南隅、白山は、八千九百尺の高峯にて、古來三名山の一に數へられ、夏時登山を試るもの少からず、白山火山脈は、是より起りて西に連り、手取川は、源をこゝに發す。海岸は、能登に連りて低地を成し、土俗に潟と呼ぶ平地湖五六あり。礪山、溫泉處々に存し、山中、山代の兩泉殊に名ありて、西南に偏る。山中は、又、塗物にも知らる、山代に陶器、九谷焼の窯元あり、縣下各處に陶器は出づれど、九谷の聞え古く、且、高きがゆゑに、皆此の名を冠す。小松は、商業振ひて、加賀絹及び、疊表を産す。金澤は、幕政の時、百萬石の大封侯前田氏の治せし處、今縣廳、第九師團司令部、第四



金澤公園之圖

高等學校あり、人口八萬に上り、殷賑北國隨一なり、兼六園は三公園の一として、諸方に知られたり、漆器、象眼細工、絹團扇等の工藝品を造る。

能登の北海に斗出せるは、伊豆の南海に於けるが如し、寶達山脈の海に逼る所、海水呀然七尾の大灣を作

る、七尾は開港場にして、浦潮斯徳との間、交通將に大いに進まむとす、名産に酒あり。北方輪島は、亦漆器を出す。地味瘠せたと、沿岸の漁利は少からず。

第十七 富山縣

管轄 越中

津幡の東、俱利伽羅峠を過ぎて、越中に入り、高岡を経て富山まで、北陸鐵道は開通したり、以往、越後直江津に至る間は、未成に屬す。

日本三山の一、立山は西南隅に峙ち、立山火山脈、其の南北に連亘す、されば、高地、國の大部を占めたと、平野の中に、神通、射水の諸川ありて、米穀の産、莫大なり。

高岡は銅鐵器の製作に聞え、北方、伏木開港場より、此の地を経て、南^{なな}城^{しろ}端^{はな}に達する中越鐵道あり。富山市^{五萬}は、神通川に跨り、縣廳あり、その賣藥は、米穀に次ぎて、當縣の大富源たるものにて、行商の盛んに諸國を遍歴するは、人の知る所なり、由來、當地は、火災多く、殊に近年、大火を蒙りて半、焼土と化したれど、今や漸く恢復せられむとせり。魚津町の海上には、時に、蜃氣樓を現することあり、此の例、伊勢の近海にでも見る。

第二章 本州北區

本洲北區は、中區の茨城縣より、富山縣に至る境界線より以北、海に至るの間なる、七縣を總稱す、新潟、福島、宮城、岩手、青森、秋田、山形是なり。

中央は、分水山脈脊骨を成し、右に、阿武隈山脈、北上山脈あり、左に、出羽山脈あり、中央、岩木の兩火山脈は、分水、出羽の兩山脈と、各相交錯して、富士火山脈に連る。

著名河流にて、信濃、最上の二條は、日本海に入る、此の海岸甚、單調にして、唯、北寄りて、男鹿半島の泛び出でたるあるのみ、阿武隈、北上の二條は、太平洋に入る、この海岸は鋸齒に似たる出入繁けれど、著きは、亦、只、牡鹿半島のみ。さ

れば、兩海岸共に概して屈曲少く、北端に斗南、津輕の二半島斗出して、青森灣を擁けるを最とすべし。

北方は、本州最寒の地にて、積雪の深さは、暖國人の想ひ及ばざるばかり、南方はさまでならず。農業を外にしては、養蠶礦業、山林等の、山國に適せる生業行はる。

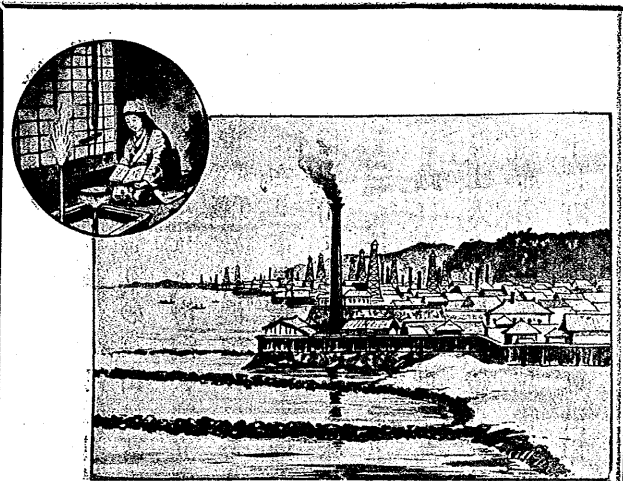
第一 新瀉縣

管轄 越後 佐渡

越後に通ずる汽車の道は、信濃より來る信越線、直江津に至り、北越鐵道に接續して、沼垂に着す。沼垂と信濃川を隔てゝ新瀉あり。

信濃川は信濃より、阿賀川は岩代より來る、その四邊は

越後平野廣くして、米の産額一年二百五十萬石に近く、全國に冠たり。内地は、出羽山脈、富士山脈、飛驒山脈等波及して、高峯數座あり、妙高山は、富士火山脈に屬し、彌彥、米山の二は、高からねど、海濱に特立するを以て、人の目を惹く。新瀉市^{五萬}は、信濃河口にあり、開港場の舊さものにて、縣廳此に在り、市況賑へども、港中、大船の碇泊に便利を缺けり。信濃川には、鮭を産す、味殊に佳し。又、この流を溯り、三條を経て、長岡まで二十里の間、汽船を通はすべし、三條に近き處に、火井とて、可燃瓦斯の地中より漏れ出づるものあり、土人之を、炭火、燈火に代用せり。長岡の上流小千谷に縮布を産す、所謂越後上布是にして、良品と稱す。栃尾紬、十日町透綾亦、この沿岸に産する所なり。



石油坑并火井之圖

信濃川東方の名色は、五泉に、平絹の産あり、村松は新發田と共に、第二師團の分營を置かる。三面川に沿へる村上も、平絹の産地に於て、川には鮭多し。西方直江津は汽船汽車の出入頻繁にして、北陸中重要な港なり。其の南

高田は、雪深き地として聞ゆ。此の邊石油の産地數多あり、本邦産額の五分四は此に出で、纔か輸入品の一部を支ふ。西境に近く、名高き親不知の絶所あり、昔は行人いたく此に難みしかと、今は新道通じたり。

新潟より海上三十二哩に、佐渡の夷港に入る、島形を法馬とすれば、夷は、其の右缺に在り、左缺は眞野の入江とて、順徳天皇の御陵近し。金北山は、金銀礦の産を以て名あり、殊に、金は一年の産額六十貫に達し、鹿兒島縣に次ぐ、古より、佐渡の土の俗語あるに、由來の舊さを了るべし。西海岸なる相川には、無名異焼てふ陶器を製る。

第二 福島縣

管轄 岩代 磐城の大部

新瀉より阿賀の川を溯り、岩代の若松に至る間は、岩越鐵道の一部に當れども、未成らず。

岩代の西境及び中央は、共に山脈を立てめぐらし、その中間の會津平を、阿賀川の支流は潤せり。此に若松ありもと會津と稱し、明治戊辰の役に、市街兵火を蒙りたれど、今は、本縣一の都會にて、近傍に會津の名を戴く蠟燭、塗物、燒物の産あり。市の東、東山の温泉は、古來有名の地とす。その東に猪苗代湖あり、西は阿賀川に水を吐き、東、疏水を以て、阿武隅川に通ず、湖上、汽船を泛べ、利用の功大なるが上、風光亦大に賞すべし。湖の北に磐梯山あり、續いて安

達太郎、吾妻など、著名の火山簇立し、之を望むもの、往時の慘を想はざるはなし。

分水、阿武隈兩山脈の間は、即、阿武隈川の溪谷にして、川は北流す、東北鐵道之と並びて、郡山にて、岩越線を若松まで發し、紬の産地なる二本松を経て、福島より陸前に入る。福島市八千は、縣廳の所在にて、東北線の一重要驛に當り、又、羽前に入る奥羽線を出せり。此の地方古より養蠶大に行はれ、生絲、蠶卵紙かいぼしの産、甚多し。半田銀山は、市の北に在り。

阿武隈山脈は、磐城の中央に横り、左右に低下す、その海岸の平地に、常磐線貫通せり、平たかは、南方の一驛にして、近山、磐城炭を産し、中村は、北方の一邑にして、相馬焼を出す。

西南、白河は、東北線に沿ひ、古昔、能因法師の詠をとゞめ、近時、維新の激戦ありき。此の國、馬を産すること多く、三春駒最も知らる。

第三 富城縣

管轄 陸前大部 磐城小部

東北、常磐の兩鐵道は、陸前の南隅、岩沼に相會し、以北は一條の線路、仙臺を経て陸中に入る。

分水嶺の餘波、西境を領する外は、北上川の平原連り、陸前米の登り、豊かなり。仙臺市此の間あり、人口七萬五千、東北無雙の大都とて、縣廳、第二師團司令部、第二高等學校を置き、青葉城址、瑞鳳殿は、共に、藩祖伊達政宗の苗を思



松島之圖

はしむ、仙臺平、埋木細工は、此の地の特産なり。市の東郊は、昔の富城野の迹にして、多賀城の古址は、その東邊に存す。鹽竈は、仙臺と鐵路を通じ、松島灣に臨む、この灣、日本三景の一なる松島を抱く、俗に八百八島と稱し、風致よろしきは、遊人の喧稱する處なり。

北上河口に石巻港あり、舟路四方に通じて殷賑を

り。その東に斗出せる牡鹿半島の内側に、荻の濱の良港あり、外端に金華山の景勝あり、金華山沖は、即彼の暖流と寒流との相搏ちて、共に没するところなり。

第四 岩手縣

管轄 陸中大部 陸前東北小部 陸奥南小部

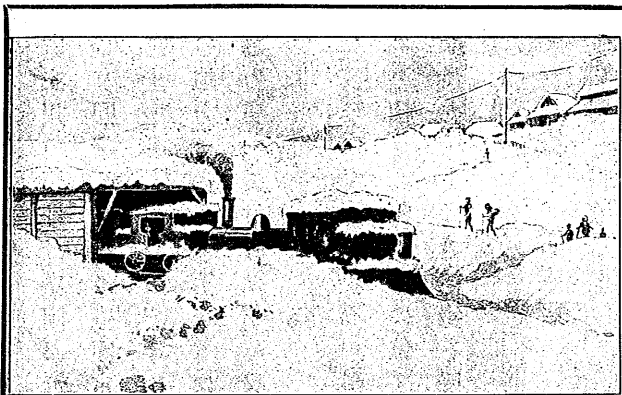
北上川と、東北鐵道と、共に、縦に中央平野を貫き、分水山脈と北上山脈と、左右之を挟む、岩手山は、前山脈の峻峰にして、早池峯は後山脈の高山なり。

陸中の南方は、舊蹟に富めり、一の關の蠶業地を過ぎ、平泉なる中尊寺は、藤原秀衡父祖三代、榮華の迹を留めて、近國に比びなき靈場たり。高館は義經の危難に遭ひし

處、衣川の柵址は、盛岡に近き厨川と共に、前九年の役の當時を回想せしむ。盛岡市三萬は縣廳の在るところ、南部富士の名を得たる岩手山は、西北に抽んでたり、すべて此の地方を、南部と稱するにより、市の名産、縮緬、鉄瓶には南部の名を負はせたり。又、南部駒は、東北方に育ち、南部米は、北上川の流域に登る。北上山脈の東側は、外南部と呼ばれ、其の南海岸に釜石の鉄山あり、一年の産額四百五十萬貫を超え、本邦の首に位す、二十九年、三陸海嘯の時、この釜石は、ためしなき慘毒を受けぬ。

第五 青森縣

管轄 陸奥大部



雪 中 流 車 之 圖

鉄道は、東北西をかけて一圓を畫し、陸中より入りて、青森までを東北線とし、其より弘前を経て、羽後に進むを奥羽線とす。
本縣は、三面海水に浸り、彎曲深くして海岸線の長きこと、東北に類少し。中央火山脈は、斗南半島の恐山より、八甲田山を包みて南走す、脈中の十和田湖は、水清澄、景勝を以てきこゆ。

山脈の西を津輕と汎稱す、岩木山は、岩木火山脈の發端にして、一名津輕富士とも呼ぶ、岩木川は津輕の平野を潤し、米を産せしむ。

青森灣邊の青森市七千は、縣廳の所在にして、兼ねて第八師團の分營を置かる、東北線路の終點に當り、東京より四百五十七哩、又津輕海峽を横斷して、正北五十餘哩、函館と通航すべし。弘前は、岩木川の上流に位し、第八師團司令部あり、津輕殻塗てふ漆器を製す。

此の縣は、本州の北端なれば、氣候は本州中最寒冷にて、降雪の期長く、鐵道には雪除けを設けたり。

第六 秋田縣

管轄 羽後大部 陸中西北小部

奥羽鐵道、陸奥より來て能代川に沿ひ、能代近くまで開通せり、こは、行く、能代、秋田を経て、南進せむとするものなり。

分水山脈を以て、東、陸中と隣り、岩木火山脈、此の西に並行して、縣境に鳥海の高嶺を起す。礦山多きが中に、尾去澤、阿仁の銅鑛、院内の銀山、殊に名あり、院内及び自餘の銀鑛を合せて、一年に七千貫の銀を産し、本邦第一たり。又、山林の好適地とす。

能代は同名の河口に位する港にて、春慶塗を産す。秋田市七千は、御物川に沿ひ、縣廳及び、第八師團の分營あり、

秋田畝織、及び、秋田八丈を織り出す、秋田藩の名は諸方に聞え、葉の大きき、開きたる傘にも似たり。附近、秋田米の産多し。土崎は能代と共に繁盛の港にして、秋田に近し。能代、秋田の中間に、八郎瀉を壓して、男鹿半島海上に懸れり、奇勝に富みて、旅客は、必、足を入る。

第七 山形縣

管轄 羽前 羽後 西南小部

秋田より御物川に沿ひて羽前に入り、山形を過ぎむとする奥羽鐵道の南下線は、未、敷設せられねど、福島縣より來りて、米澤を越えたる同鐵道の北上線は、早や、山形をへて楯岡まで開通せり。

最上川は三急流の一なり、東西の國界線に並行して、日本海に朝す。山勢は、羽後の餘波を受けたり。羽黒山、月山、湯殿山は、羽前の三山とて、行者の險を犯して登るもの相つぐ、共に岩木火山の連脈なり。

最上川の下流地方を莊内と呼び、米産多量なり、吐口羽後の部に、酒田の良港あり、その南に當れる鶴岡に、繪蠟蝋を産し、大山に酒を産す。

分水山脈の麓には、新庄、山形、米澤の三都會相重れり。

新庄は龜綾織てふ透織を出し、山形市^{三萬二千}には、縣廳、第八師團の分營あり、もと最上と稱せり、近傍上の山溫泉には、浴客絶ゆる時なし。

第三章 本州西區

本州の中、琵琶湖以西を西區とす、畿内、山陰、山陽の兩道及び、南海道の紀伊、淡路二國を包括し、京都、大阪の二府、奈良、和歌山、兵庫、鳥取、島根、岡山、廣島山口の八縣に分る。

大和、紀伊の地には、紀伊山脈、四國に連り、其の分嶺に、鈴鹿、笠置、葛城、和泉の諸山脈あり、中國には中國山脈あり、前者と共に、崑崙山系の分脈にして、九州より延びたるものなり。

畿内は、平野、淀川の沿岸に瀕り、大都此に集れり。中國の部は、山脈、山陰道に偏り、礪碕の地多し、その江川は西區第一の長流たり。山陽道は、濱海の平野開けて、有用の河

川少からず、港灣都邑、亦此の方面に繁く、交通開け、人口の稠密なるは、山陰道の遠く及ばざる處なり。

第一 京都府

管轄 山城 丹波 大部 丹後

鐵道の、京都に通ずるもの四條あり、東海道線は、東京と大阪とに、奈良鐵道は、奈良に、京都鐵道は、既に丹波の園部に達し、他日丹後の舞鶴軍港に至らむとせり。琵琶湖の疏水も、亦交通運輸を助く。

京都の周圍に、東山、北山、西山あり、東山は、近江境なる比叡山より續き、銀閣寺、平安神宮、知恩院、扱は、清水焼の名に負へる清水寺もあり、北山は牛若の稚話（牛若の稚話）に聞えし鞍馬山、



紫宸殿之圖

足利義滿が豪奢の名残なる金閣寺のある處、西山は、櫻の嵐山、紅葉の高雄山を春秋の双絶として、雅客の湊ふ地なり。

此の名勝舊蹟のたゞ中に、京都市は、榮えたり、桓武天皇以後、明治の初年まで、一千年餘りが間、

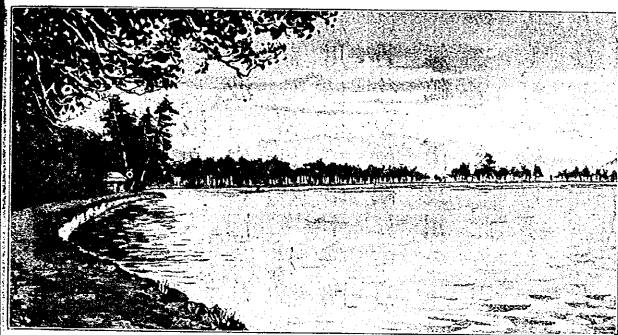
代々の天皇の宮居ましくし御跡にて、禁裡御所は市の北に、二條離宮は西にあり、街路整然として、碁磬の面の如し、人口三十五萬に餘り、府廳、京都帝國大學、第三高等學校、博物館、此に在り、此の市の由來、かく舊ければ、住民は、尙古の優美の性を保ちて、産物などに、其の面影を表せり、西陣の織物は、巧緻無比を天下に誇りて、年々の産額、三千萬圓内外に達し、當府の絹織産額をして、全國の首たらしめ、或は、染物、陶器、七寶、紅、白粉など、其の産出する所、一に、美術工藝品に屬す。

加茂川市中を串流し、桂川と、鳥羽に會す、戊辰の軍ありし地なり。鳥羽の東に、伏見あり、伏見人形に名ありて、今第四師團の分營を置かる。伏見の南、宇治川に沿ひたる

宇治は、有名の茶産地にて、品質佳良、産額靜岡縣に次けり、源三位賴政は、埋木の詠を残して、此處なる平等院に自殺せり、宇治川は、琵琶湖に發し、笠置山麓を廻り來る木津川と共に、淀川に入る。

丹波は、山に圍まれ、丹後に境せる、大江山は、酒顛童子の昔語に傳はれり、丹波栗は、當國の名物なり。福知山は、福知川に沿ひ第十師團の分營あり、阪鶴鐵道は、此に達し、將に丹後の舞鶴に至らむとす。

舞鶴は、由良川の下流に在り、軍港の一にして、日々、盛を致せり、すべて、此の國の海岸は、若狹にかけて、屈曲犬牙を成し、海岸線の多きこと、日本海側にては、稀有の例たり、されば舞鶴の西、宮津は、既に開港場の數に入り、その灣頭に



天の橋立之圖

漂へる長洲、天の橋立は、三景の
一に加りて、佳景を稱せらる。

此の地魚類を獲ること、亦
少なからず、されど、特産は丹後
縮緬にして、峯山を其の中心
とす。

第二 奈良縣

管轄 大和

奈良鐵道、京都より來りて
奈良を貫き、五條よりは、紀和

鐵道となりて、紀伊に入る。奈良にて此の線と斜に交る
は關西鐵道にして、名古屋より來りて、大阪に行く。

この鐵道の縱横する間は、國の西北の平野にて、大阪灣
に注ぐ大和川の支流の滋潤するところ、他は、山又、山を重
ねて、森林茂れり、大和の木材は即ち是より出で、吉野川、十
津川の流を利用して、紀伊地方に運び出す。

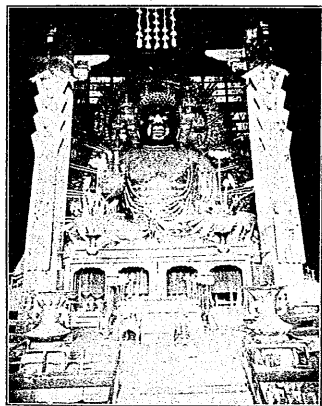
大和は、神武天皇の、橿原に即位まし、しよりこの方、
平安遷都の時まで、歴世諸皇の都し給ひし地なれば、宮址、
陵墓を始めて、古蹟、名勝に富むこと、山城と相若く、世に、大
和廻りと稱へて、杖を國內に曳くもの昔より絶えたるこ
となし。奈良市^{三萬}は、大和川の流域に位し、縣廳の所在に
して、又、奈良帝室博物館あり、元明天皇より七代の天皇は、



春日神社之圖

此を都とし給ひしかば、こを奈良朝とまうし奉る、町の東に春日神社、東大寺などあり、神社、佛閣の世に聞えしもの、一二のみならず、就中、東大寺の正倉院、大佛は、史上の貴重なる參考たり、奈良晒布、奈良漬、奈良人形、鹿角細工、等有名

の土産あり。三笠山は、仲麿の歌に残りて、遊子の情を抒べたり、更に東境、名張川を挟みて、天下一、月の瀬の梅林は、

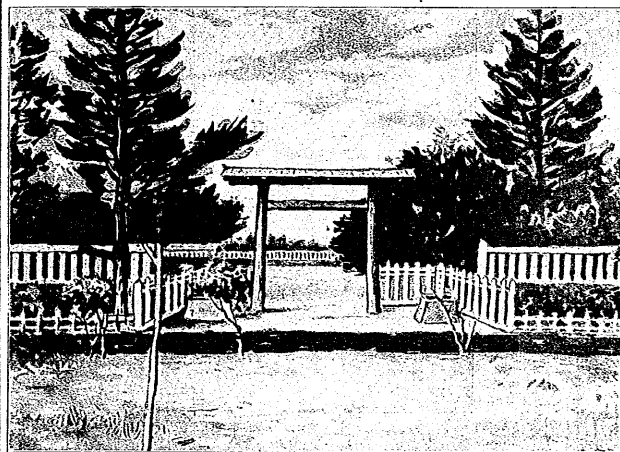


大佛之圖

數里に連り、我が邦の羅浮と稱せらる、其の梅實は用多し。

奈良より郡山を経て、法隆寺あり、南都七大寺中、鐺々たるものにて、其の金堂は、我が古代建築術の模式たるものなり。

櫻井は、奈良の正南にて、奈良鐵道と、關西鐵道との直角に逢ふ處、長谷觀音、畝傍山、談山神社、皆近し。



神武天皇御陵之圖

吉野川以南は、即、吉野諸山の重疊する境域に屬し、道者相伴ふて、所謂山上客りに上下す。吉野山は櫻樹を以て宇内に鳴り、花時の絶景言はむ方なし、義經が峯の白雪踏みわけて入り、南朝三代の帝の、假の宮居をしつらひ給ひ、正行が梓弓ひきは返さぬ、赤

心を雕りしも、皆この山なりき、吉野葛、吉野漆、吉野紙を此の郷の産物とす。紀伊に近き十津川郷は、亦大塔宮の匿れさせし地なり。

第三 和歌山縣

管轄 紀伊大部

紀和鐵道、大和五條より、紀伊に入り、吉野川の下流、即、紀の川と相並びて、河口なる和歌山に達す。大阪より、南海鐵道に由りても來ることを得。

和歌山市は縣廳の所在、徳川三家の一たる紀州家の舊治下にして、繁榮今も變らず、人口六萬三千あり、綿、ふらねるの本場たり。此南、一小灣を和歌の浦といふ、三景に



那智瀑布之圖

亞ぐと稱せらるる名勝にて、和歌海苔の産あり。西北加太岬は、淡路と對して、紀淡海峽を挟み、そこなる友が島に、砲臺を設けて、大阪灣口の警備とせり。和歌山より紀の川を溯れば、根來寺、粉河寺あり、更に大和に近く、高野山あり。

り、弘法大師の開基に係る金剛峯寺の所在にて、信仰の者夥し、高野杉、高野槇などは、名高き高野山林を成す樹木なり、氷豆腐、亦多く製せらる。

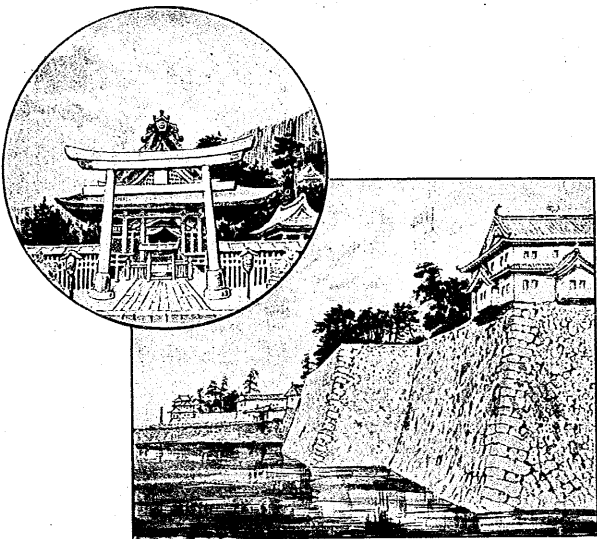
以下海岸を廻らむ。黒江は漆器に名を博し、産額の多きは、本邦一たり。有田川附近は、紀州蜜柑の中心産地にて輸出多く、諸方に珍重せらる。日高川に近き道成寺は、僧安珍が昔譚を残しゝ處。潮岬以東は、熊野灘と稱し、舟行危険なる海なれど、鯨を獲べし、其の内地は、即、熊野地方にして、森林の大、高野を凌ぎ、良木炭を出す、那智山は、新宮、本宮と共に、熊野三社を祀る、那智瀑布は、全國無比の大觀たり。新宮川の崖頭には、怪巖奇景を成して、瀨八丁と名づけたるがあり。

第四 大阪府

管轄 攝津東半 和泉 河内

神武天皇、中州を平定し給はむの大御心より、舳舻相啣みて、吉備より、浪速の國に、向ひ給ひぬ、後年、仁德天皇の都せさせし、難波津は、即、此なる港にて、朝鮮より來る貢船に、賑ひいやまさりて、我が國文化の中樞となれり、其より一千年、秀吉の大阪城を築き上げてより、は、所謂三府の一となりて、商業の勢力、風俗の影響、今は、日本の西半を支配するやうになりぬ。

鐵道、大に紛錯し、市中に十八箇の停車場あり、中にも、北端、梅田の停車場は、東海線、關西線等の會する處にて、美麗



大阪城之圖

四條神社之圖

宏壯、日本第一の稱に恥ぢず。東海線は京都より來て、神戸に行き、關西線は、奈良、名古屋に向ひ、南海線は、和歌山に至る。

市の廣袤、東西三里半、南北二里半、人口は

八十萬に過ぎ、府廳、造幣局等あり、大阪城内には、第四師團司令部を置かる、街衢正しく、溝渠四通し、淀川亦こゝを貫きて、橋梁の數多きに驚かざる者なし、道頓堀心齋橋などは、雜沓を極むること、東京の銀座などにも超えたり、淀川の末、數分し、その安治川口へは、鐵道梅田より來る、此處は、五港と並ぶ開港場なるが上、當時公債等を資として、大築港の工事に従ひたれば、竣功の日は、盛況更に倍蓰すべし。起源遠き地なれば、名蹟も乏しからず、仁德天皇の高津神社、又天滿天神、四天王寺は、社寺の尤なるものとす。製造工業の大、比なく、紡績の如きは、全國の半を占むるに近からむとす。

堺は、和泉の北境大和川口なる舊港市にて、足利氏の頃

は、外國との互市場なりしかと、今は水淺せて、大船を入るべからず、市東に、仁德帝の御陵あり、又、堺段通及び、又、物類の特産物を以て名あり、以南紀伊に入る間、山海に好風景の地あり。

河内の東境は、葛城山脈屏立して、畿内平野を割きたり、この脈の南隅に、正成の義名を留めし金剛山巍然として、千早城址もあり、北方飯盛山に、正行の英靈を崇めたる、四條畷神社あり、當國を訪ふもの、楠公父子の威烈に感激せざるはなし。

この山脈以西、淀川沿岸は、即、畿内平野にて、綿米、菜種一面に繁植さる、河内の木綿、大阪の菜種油、共に原料を此に採り、共に名産として聞ゆ。尙大阪の産物に、石鹼、莫大小、

摺付木、麥酒など、新製造品の多きをも忘るべからず。

第五 兵庫縣

管轄 攝津西半 丹波西南部 播磨 淡路 但馬

大阪より西、攝津の海岸を走り、東海道線路の終點に神戸あり、東京より三百六十七哩、以西は山陽鐵道となりて、山陽道の沿岸を縫ふ。

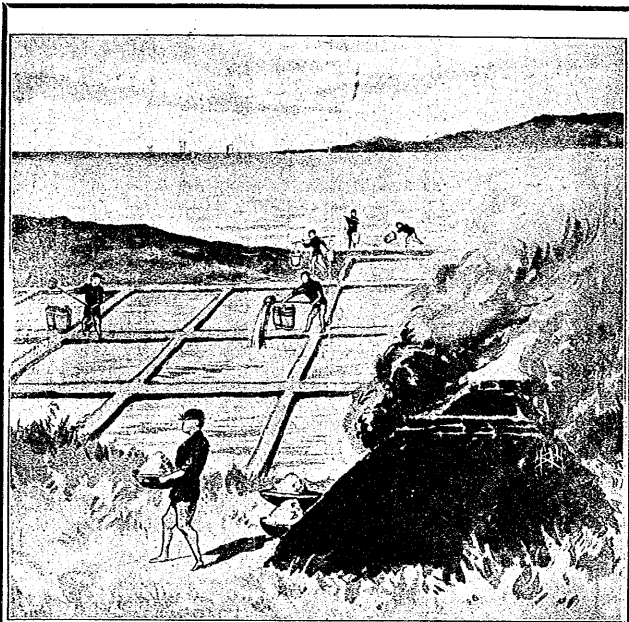
神戸市はもと、神戸、兵庫の二に分れたりしを、今は合して一市とし、人口二十一萬を超えて、盛を横濱と競ふ、第一流の開港場にして輸入の多きは、彼を凌ぐといふ、又、縣廳あり。湊川市中を流れて、楠公社には、嗚呼忠臣楠子之墓と刻める碑立てり、此の河底は、人家よりも高く位し、見る

者をして、甚怪ましむ、河岸は遊園となれり、大阪と共に摺付木、紙等の製造盛なり。又、山陰道より齎せし牛を、神戸牛と名けて、良質の名を傳へたり。

神戸以西の地には、古蹟あまた散在せり。清盛が暴慢のためしに引かるゝ福原都の跡、源平二家が、鎬を削りし一の谷、月に歌人のあくがれし、須磨の浦など、聞くばかりも、樂しき地なり、まして隣國の播磨は、播磨廻りとして、雅人の喜び遊ぶ地に續きたれば、名所に飽かむも難からじ。神戸の東北に布引の瀑布、有馬の溫泉あり、共に著名の勝地なり、其より東に西の宮、御影など、酒造を專業とする地あり、之を灘五郷と總稱して、其の酒は、全國に弘まれり。縣の東隅、尼が崎は、彼の義經が暴風を凌ぎて、兵船を出し

し大物浦なり、こゝより阪鶴鐵道は北走し、何れも酒に名ある、伊丹と大阪府の池田とを経て、本縣所轄の丹波部なる名邑篠山をも貫き、京都府福知山に至れり。

播磨に入れば、舞子、明石の濱邊の景色は、人も知りたり、明石縮明石珠の如きは、特に有名なり。加古川口に近き高砂、尾上、曾根は、松の名所、石の寶殿は傳説奇なり。市川の下流なる姫路は、當國一の都市にて、第十師團司令部あり、姫路木綿、姫路革の産物の外、近郡、素麵を出すこと夥し、その中、龍野に醬油の名産あり。西南隅、赤穂は、四十七士の名と共に、製鹽の事業を以て響きたる地なり、もと中國と四國との中間なる海を、瀬戸内海と稱し、降雨最少くして、海水鹽分を含むこと大なれば、此の海の沿岸地方に、鹽



赤穂鹽田之圖

を産出すること、極めて多く、之を十州鹽田と總稱せり、その中、良品を出すに至りては、先、この赤穂を推さざるべか

らず。又、沿海の平野は、播州米の收穫豊富なり。

播磨の東端、明石海峽の前に、呼ばゞ應へむばかりに、淡路島は泛べり、東端紀伊に對して、由良港あり、砲臺を築けり。洲本は、此の國一の名邑にて、鳴戸海峽に向へる福良も、稍見るべし。淡路焼を、此の國の産物とす。

姫路より北して、但馬に入る、播但鐵道は、金銀山に名を得し生野を經。其の北出石川に沿へる出石に、地名を冠せる焼物を製し、豐岡は柳行李を製す。下流は、城崎川となり、温泉場、城の崎及び、玄武岩の奇觀を呈する玄武洞此に沿ふ。

第六 鳥取縣

管轄 因幡 伯耆

播州姫路より、因幡の鳥取を經て、鳥取縣、鳥根縣の海岸に、官設山陰鐵道を敷かむの計畫は定れり。

鳥取市八千は縣廳の所在にて、千代川の下流に立つ。

白山火山脈は、伯耆を通過する際に、中國第一の高峯、大山の休火山を崛起せり、一名を伯耆富士と呼ぶ。この北に連る船上山は、元弘帝、隱岐より還幸ましくし折名和長年が迎へて護り奉れる舊蹟なり。

米子は西角の一市街なり。夜見濱の長洲前に斗出して、風致賞すべく、北端に、開港場境ありて、出雲の鳥根半島と觸れむとせり。

伯耆は、綿産地として、本邦に冠たり、伯州木綿の由來遠

さも、理あるなり、又米、鐵の産少からず。

第七 島根縣

管轄 出雲 石見 隱岐

縣下、米、鐵道なし、但、計畫線には、鳥取、廣島より、出雲に入らむとするものあり。

出雲の國境に船通山あり、斐伊川の源にして、神代の昔、素盞鳴尊が、八岐大蛇を斬りて、天叢雲劍を得給ひしは、此の山の麓なりと言ひつぎたり。斐伊川は、國の真中を流れて、矢道湖に入る、湖東に松江市四千萬あり、山陰第一の名區にて、縣廳あり、湖口に橋を架け、市街はその南北に續けり、舊松江城上より見渡したる景色、頗、掬するに足り、湖水



出雲大社之圖

より獲る鱸、味喜ぶべし。島根半島は、伯耆の夜見濱と中海を圍み、其の端に、美保が關あり。

出雲大社は、杵築にあり、祭神大國主命は、太古、夙に、我が中州を經營し、之を天孫に傳へ奉れり、出雲の神といへば、知らぬものなし。此の國礦物に富

み鐵、石炭、瑪瑙を主とす。

石見は、山脈南に蔓り、通路不便なり、江川は、巨流をなして、此の間を貫流す。河北邇摩より銀を産す。濱田は開港場にして、第五師團の分營あり、石州半紙此に集る。長門に近き津和野も、亦一邑なり。

出雲の海上、隱岐火山脈の通路に、隱岐島あり、島前島後の二に分れ、島前は、中の島、西の島、知夫里島等より成れり。島後は、諸島の最大なるものにて、西郷の良港あり、錫の漁盛んなり。曾て後鳥羽上皇は、北條義時に、後醍醐天皇は、同高時に、共に遷されて此に座しませり、其の御跡を吊ひ奉る者皆涙を止め得ず。

第八 岡山縣

管轄 備前 美作 備中

播磨境なる船阪峠の隧道を貫きて、山陽鐵道は、本縣の海岸を走り、其の中間なる岡山よりは、中國鐵道、美作の津山に至れり。

備前に東西の兩大川あり、東大川の東に、伊部の陶器產地あり、長船の刀劔は、古今に名を博めたり。岡山市は、西大川に跨り、縣廳、第六高等學校あり、實に、中國文化の中心たらんとす、此の地に三公園の一なる後樂園あり、綿絲、紋蕙の製造大に行はる。南の方、兒島灣を隔て、兒島半島には、元暦の頃、佐々木盛綱が、平軍を破りし藤戸の古蹟あり。

美作は、山地にて、牛馬を飼ひ、烟草を栽う。津山は、稍繁華の地にて、足袋を出す。西方に、兒嶋、高德が櫻を削れりと傳へたる院庄、及び古歌の名所なる、久米の皿山あり。備中には、鐵道に沿ひて、都邑二三あり、倉敷は、河邊川の東に位し、河西、玉島と共に紡績に名あり。笠岡は、我が無二の麥稈、眞田製造地にて、海外の輸出、大なり。

第九 廣嶋縣

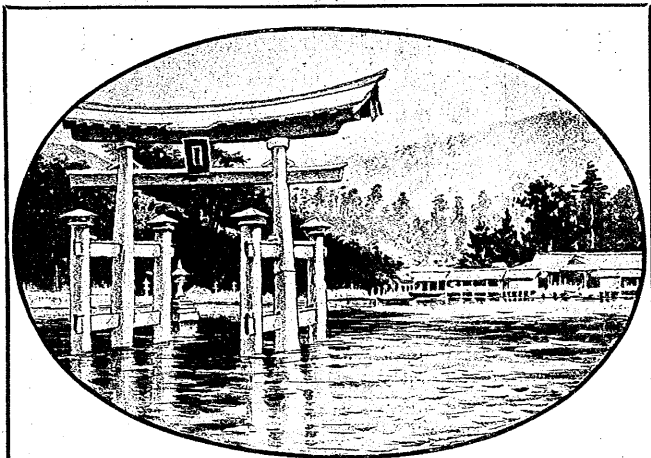
管轄 備後 安藝

山陽鐵道は、福山、尾の道、廣嶋を経て、周防に至る。江川の上流、備後の北方を還流し、その間に、御神山あり、奇岩、帝釋の鬼橋を以て知らる。福山の南、鞆津には、保命

酒の名産あり。尾の道は、内海の要津にして、疊表を産す、すべて、三備の近海、多濕の地には、藺を植ゑて、盛んに、莛、疊表を織り出す、中にも、備後表の名は、全國に轟けり。元弘の忠臣、櫻山、茲俊を祭れる祠は、尾の道の北方にあり。

安藝の地勢は、備後に似て、北角に、江川の上流あり。太田川の廣嶋灣に注ぐ處に、廣嶋の大都市あり、縣廳及び、第五師團司令部を置く、二十七八年役に、天皇陛下、此に大本營を進め給ひしことありしより、市況、俄かに振ひ、今、人口十一萬以上ありて、中國隨一の都會たり、諸種の鐘詰を賣り出す。宇品港は、鐵道もて市と接せり、この戰に、軍兵の船出せし處とす。灣頭には、吳軍港あり、海軍兵學校の所在、江田島と相對す。灣内、牡蠣を飼養し、廣島牡蠣とて、美

味の評、上方に騒し。
日本三景の一、嚴島
亦この内灣に在り、
殿廊の美觀、溪山の雅
致と相俟ちて、常に遊
人を引く、實に平清盛
が紀念なり、宮嶋細工
を名物とす。



嚴島之圖

第十 山口縣
管轄 周防 長門
廣嶋より續ける山

陽線は、此の二國の海岸を廻り、赤馬關に至りて止む、神戸より此處まで、二百七十五哩、本州の幹線たるべき鐵道は三府、盛都を貫通して、東端青森より、西端馬關まで、かくて敷設の功を竣へたり。

周防は、北境長門に續きて、中國山脈連亘し、此より出づる岩國川に臨みて、岩國あり、縮布を産す、此の川に架れる錦帶橋は、甲斐の猿橋、越中黒邊川の愛本橋と共に、日本三奇橋と稱せられ、形畫に見るが如し。沿岸に柳井津、徳山あり、三田尻と共に、此の國の良港と稱せらる、三田尻は殊に、製鹽を以て名高し、凡、本縣は、全國一の製鹽地にして、百萬石を産出し、其の他の漁利にも富めり。米は防長米とて産額少からず。山口町八千萬は北方の山間にあり、縣廳

第五師團分營、及び山口高等學校あり、大内氏の此の地に據りし頃は、文化中國に冠たりき。

長門に、山陽線の終點赤間關あり、又、馬關と稱し、或は開港場としては、下の關といふ、早輅の瀬戸を挟みて、豊前の門司と相對し、正に、本州、九州の關節に位するを以て、砲臺を設けて、之を護る、人口四萬を過ぎ、商賈の盛、中國中、廣島に次ぐと稱せらる、彼の日清戰役に、媾和談判を開きしは、實に、此の市なり。市の東端に、平家一門の跡たえし壇の浦の古戰場あり、市中に、安德帝を奉祀せる赤間の宮あるを思ひ合すべし。硯、煙草を名産とし、又、石炭を輸出すること多し。日本海岸に、毛利氏の舊城地、萩の一港ありて、夏蜜柑を産す。

第四章 四國區

本州と九州との間に分在する、四國島は、南海道の一部にて、面積一千一百五十方里あり、阿波、讃岐、伊豫、土佐の四箇國に分れ、徳島、香川、愛媛、高知の四縣にて之を治む。

四國山脈横に連りて、南北の分水界を成し、本州の中國山脈と協力して、太平洋、日本海の水蒸氣を遮蔽し、以て瀬戸内海に雨を少からしむ。此の脈分れて阿波の南北兩境に這ふものあり。

川は吉野川、最長く、所謂四國三郎の名あるものはなり。沿岸の地、岬灣の顯著なるもの多く、内海には、島嶼、許多散點せり。

第一 德島縣

管轄 阿波

吉野川の口に徳島あり、鐵道川と並行して、中流地方に遡れり。川の近邊に、藍を植ゑ、産出の多こと、之に及ぶものなし。上流に祖谷山あり、蔓橋の奇名を馳せたり、劍山、その東南に聳え、夏時道者の登る者多し。



阿波の鳴門之圖

徳島市は、縣廳のある所、昔は、蜂須賀氏の城地にして、今も人口六萬に餘り繁榮四國に首たり、阿波縮布を産す。撫養は、淡路と對せる港にて、音に聞えし鳴門の瀬戸はこゝなり、水路急激にして、渦紋を成し、舟行危けれど、その鯛は佳味敵するもの少し、此の邊の齋田鹽、亦、甚有名なり。

第二 香川縣

管轄 讃岐

讃岐鐵道は、高松より丸龜を経て、多度津に至り、南折して琴平に達す。その高松は、航路、東は大坂神戸、西は内海の諸港に通じて、交通の要地たり。

高松市三萬四千は縣廳の所在にて、其の公園の閑雅は、稀に



高松公園之圖

見るところとす、保
多織の産あり。五
劍山此の東に峙ち、
裾は、即屋島の古戦
場なり。其の前に
小豆島ありて花崗
石の大産土たり。
五劍山と相對して、
高松の西白峯には、
崇徳上皇の御陵を
存せり。丸龜は、第
十一師團司令部の

所在、多度津は良津にして、内海の航船常に此に經由す、是
より南琴平への途上、弘法大師の生地、善通寺あり。琴平
には、琴平神社あり、祭神は、大日貴命にして、社殿壯麗、諸人
の來賽するもの、實に、伊勢大廟に次いで多しとぞ。
本縣は、砂糖の産地として、他に比肩するものなく、就中、
東隅引田を以て、其の最とす、食鹽、烟草の産出、亦、共に大なり。

第三 愛媛縣

管轄 伊豫

鐵道は、松山附近に短少のものあるのみ、未、四方の交通
を助くるに至らず。

南境に、四國山脈の最高峯、石鎚山あり、險阻甚しきを以て、登山の者は、鐵鎖を攀ちざるべからず、されど、絶頂の眺望、瀾大無比なり。この東に、別子銅山あり、盛大足尾に次ぐ、之と並びて市の川安質母尼礦あり、本邦より出づる同礦の八九分は實に、此の出なり。

松山市三萬は、縣廳の所在にて、兼ねて、第十一師團の分營を置かる鐵道是より四方に放射するが中に、古來、著名の道後溫泉に通ずるあり、阿蘇火山脈の通路に當れり。西方には、佐田岬の遠く突出するあり、海岸長き國なれば、名ある港數々ありて、松山以比に、三津が濱、今治以南に、八幡濱、宇和島を數ふべし。産物の名あるは、伊豫絋、伊豫簾、紙蠟等なり。

第四 高知縣

管轄 土佐

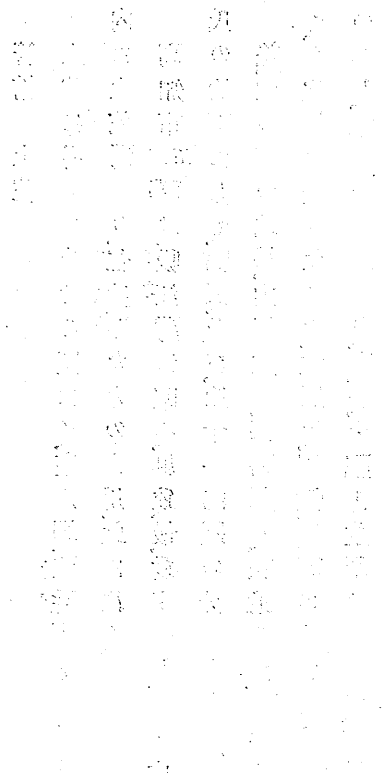
土佐は弓形を成せる國にて、室戸岬、蹉跎岬を兩端とし、内に土佐灣あり、仁淀渡などの大川、此に注ぐ。

高知市三萬は、吸江灣に臨み、風致最、愛すべし、もと山内氏の治下にして、縣廳及び、第十一師團の分營あり。

蓋、此の國の地勢、山嶽重り、海路荒く、交通の途、疎きを以て、文化他に後れたれど、住民は、剛健、質素の古風を守るもの多し、維新の當時より、薩長、土肥と並稱せられて、政治の上に、要位を占むるを得たるも、偶然にはあらず。

産物土佐半紙、土佐鯉節は、共に、全國第一の名を博し、珊

珊瑚、眞珠、鯨の如き海産の富もあり。



九州の位置

第五章 九州區

九州の面積は、四國に二倍せり、之に、壹岐、對馬の二島を加へ、すべて十一國を、福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿兒島、宮崎、大分の七縣にて分轄せり。

九州島は、直に、本州、四國の二島の西に接し、支那より脈を延ける、北部山脈及び、南部山脈は、各、本州及び、四國に侵入し、川には、筑紫次郎の稱ある、筑後川、筑紫瀉に注ぎ、沃野最開く。

此の邊の海岸、屈曲を極め、島嶼、亦、頗多く、天草、甌屋久、種子、大島、五島、平戸、壹岐、對馬、等、一々枚舉にたへず。

本島は、礦業、農業、非常に進歩して、諸生産中の主位を占

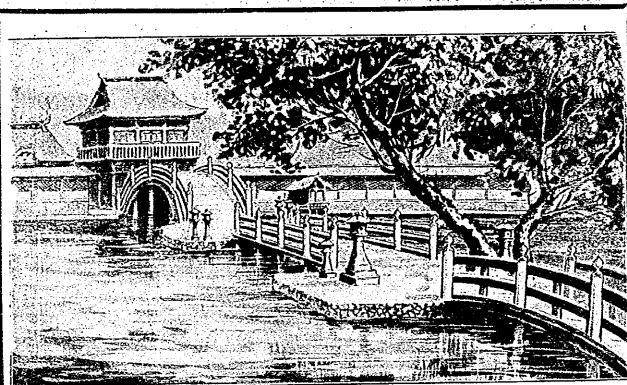
めたり。

第一 福岡縣

管轄 豊前北半 筑前 筑後

九州鐵道は、北端門司より起り、小倉、福岡、久留米を経て、肥後に入る、其の間、小倉より行橋に至る支線は、大分縣の宇佐に通じ、折尾より南北に交る支線は、北、若松、南、採炭地方に通じたり。

豊前の門司は、開港場の一にして、中國の赤間が關と呼應し、緊要の地を占めて、輸出の石炭常に堆積したり。小倉は、第十二師團司令部の所在にて、小倉織の名、弘く傳はれり。



太宰府神社之圖

筑前の福岡市^{六萬}三千は、舊の福岡、博多の兩地を合一せし名にて、九州第二の都會たり、縣廳を此に設く、福岡は、以前、黒田氏の封地にて、その城址には、今、第十二師團の分營を屯す、博多は、その東に接し、要津として、名、既に古代に顯れ、今は開港場に加りて、博多織の名産あり。此の市の前面は、福岡灣にして、海、中道、その

右邊を成し、志摩半島、西壁を成す。海中道は、白砂青松、遠く海に泛びて、風光賞すべく、志摩半島には、芥屋大門とて、絶壁二百尺の玄武岩に、大洞口を穿てる怪奇の景を有せり。灣の東側に、仲哀天皇、神功皇后の行在たりし香椎、及び、箱崎八幡宮あり。其の外洋は、即、浪險しき玄界灘にして、元艦覆滅の故迹なり。福岡の東南に、古の太宰府の趾あり、道眞が流謫せられし地にもあれば、太宰府神社を建てたり。近傍、觀世音寺は、太宰府繁昌の當時、九州一の大茄藍たりしものなり。

兩筑の國境に筑後川あり、源を豊後に發す、附近土肥え米穀豐饒にして、縣下の米産額は、新潟に次ぐの盛を致せり、又多く藍草を栽う。筑後の久留米は、此の川に瀕し、舊

有馬氏の城市にして、亦、第十二師團の分營を設けられ、紺飛白を産す。西隅、三池は、石炭産出の、最名を得たるものなり、蓋、本縣、石炭の多量なる他に匹儔なく、この三池、並に筑前の遠賀川流域の地を主として、縣下の總採炭は、實に全國の七割を占めたり。

第二 佐賀縣

管轄 肥前の東半

九州鐵道の筑後に入らむとする際に、肥前の東隅、鳥栖より分れて、佐賀を過ぎ、長崎に至るあり、西方には、産炭地、産陶地に、各、鐵道ありて、貨物運搬を盛んにせり。

國の北方をかけて、九州北部山脈、筑、豊に連り、その石炭

の産は、筑豊と並稱せられ、殊に、唐津を最とす。筑後川の平野は、土地潤澤、米産少からず。

佐賀市^{三萬二千}は、此の平野に立つ、鍋島氏の治下たりし地にて、縣廳あり、江藤新平が亂を起し、處なり。牛津より、將に鐵道を通せむとする唐津は、唐津灣、即、松浦灣に臨める開港場にして、石炭の外、陶器の産に富み、唐津物の稱を恣にせり、灣邊には松浦佐用媛の故事を留めたる、領巾振山の立てるあり。秀吉が、征韓の陣營を設けし、名護屋は、その外海の端に位す。長崎縣に近き、有田、伊萬里は、産陶地の古きものにて、美麗の磁器、多く出づ、互の間鐵道を通じたり。

第三 長崎縣

管轄 肥前 西半 壹岐 對馬

九州鐵道は、早岐^{はき}にて二分し、支線は佐世保に、本線は大村灣邊を走りて、長崎に至る。

肥前の西半は、半島四出し、島嶼點在して、海岸線著く延び、良港に富みたり、此の地は、耕作よく行はれて、肥前米の登り夥し。

佐世保^{三萬四千}は、軍港の古き一にして、其の西北に接邇せる平戸島は、中古南蠻人と貿易を始めし地なり。第六師團の分營ある大村を過ぎて、長崎あり、五港の一として、夙く文明の風を學び、支那、和蘭との貿易、盛に此に營まれしかば、外國の事物の、此の地を經由して、内國に傳播せるも

の多多なり、人口十萬に餘りて、九州第一の都府を成し、縣廳の所在にて、物産は長崎烟草を稱すべし。長崎の海上數哩に、孤島高島あり、全島石炭よりなると稱せらるゝ大坑にて、規模、壯大を極め、産額の大比類なし。此の海上に、五島相列れり、その福江町、稍、賑ひ、五島錫の名高し、其の他鯨節、鯨、鯨、雲丹など、水産の富、九州第一たり。長崎半島と左右に居る島原半島は、霧島火山脈の終る處にして、溫泉嶽あり、溫泉の涌き出づること多し。島原は、天主教の亂に、天草四郎の據りて、幕府に抗せし迹なり。半島の南端には、開港場口の津あり。

壹岐は、日本の最小國にして、勝本の一港あり。對馬は、朝鮮釜山を去る僅に三十四哩に迫り、嚴原、鹿見、佐須奈の

三開港場あり。

第四 熊本縣

管轄 肥後

筑後より來れる九州鐵道は、熊本を経て、八代に至る、熊本、南、宇土より、三角に至る支線を出せり、八代以南は、將に薩摩の鹿兒島に通すべき豫定なり。

肥後は、鬼面の形を成せる國にて、南部山脈、日向と界を分ち、面の角に當る部に、阿蘇の噴火山あり、その舊火口の大なる、世界無比と稱せられ、硫黃を出す、實に、阿蘇火山脈の起點なり。南方に、九州の最高峯、市房山は、六千尺の空に聳え、中國四國の各最高峯と、高さ相若く。田野よく開



球摩川之圖

け、菊池川、白川、緑川、球摩川、灌流し、良質の肥後米、及び麥、粟等の産額、大なり。球摩川は三急流の一にして、河源、五家の山中は、平家の殘族が世を忍びてありし處、永く他と交通を絶ちたりき。熊本市は、縣廳の所在にして、又、第五高等學校あり、舊、細川氏の

治下にして、人口五萬五千を有し、尙、盛名を墜さず、清正の築きし熊本城は、第六師團の司令部となれり、西南役に敵と久しく對抗せし事實は、人のよく知るところなり。熊本、本の北方、處々、西南役激戦の迹あり、田原坂の如きは、その最なるもの、就きて遊ばゞ、坂上の紀念碑に、當時の景況を察すべし。

宇土半島の尖端に、三角開港場あり、天草島、前に蟠り、賴山陽が萬里泊舟と歌ひし天草洋は、その外海なり。八代は、熊本に次ぐ都邑にして、同名の灣に瀕す、古來有名なる不知火は、此の邊に見ることあり、又、球摩の急流を、人吉より下りて來るべし。

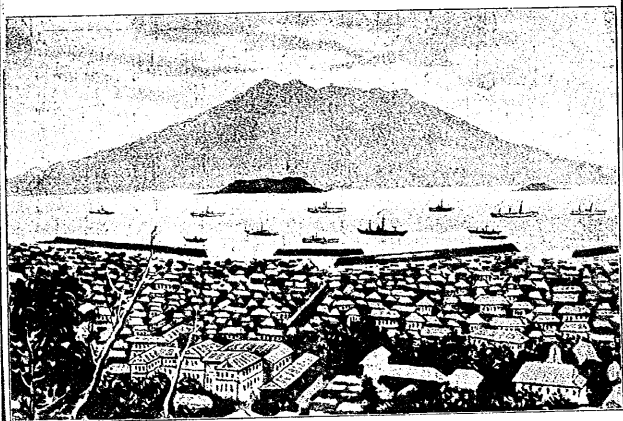
第五 鹿兒島縣

管轄 薩摩 大隅

肥後八代より出づる鐵道は、此の縣の國分まで、未成らざれど、國分よりは、官有鐵道、鹿兒島に達したり。

霧島火山脈、大隅、薩摩に跋扈し、鹿兒島灣なる櫻島の御嶽、開崎なる開聞嶽等、著名なり、又、金、銀、鑛山多く、殊に、薩摩の鹿籠、芹野、大隅の山野等より採る黄金は、佐渡を凌ぎて、海内第一の量あり。農産中、砂糖、烟草、甘藷は、いづれも多大の産出あり、又多く馬を飼ふ。川は薩摩の川内川を第一の長流とす。

鹿兒島市三萬は、御嶽と相對し、昔は、島津氏の城下たりしが、今縣廳及び第六師團の分營を設けたり。こゝは、西



鹿兒島より櫻島を望む之圖

郷隆盛の生地にて、市の西北、城山は、即その終焉の地なり、薩摩上布、薩摩絣、薩摩節を産す。伊集院に接して、苗代、川村あり、昔、島津義弘、征韓役に秀吉に従ひ、彼の土の陶工を伴ひ移し、處にて薩摩焼の名陶を製出す。肥後街道に當れる阿久根の焼酎、亦名を得たり。大隅の國分は、烟草の

名産地にて、北境霧島の硫黄は、量甚多し。
 是より南方、沖繩島に至る海上に羅列せる諸島を、大隅
 諸島又、薩南諸島と稱す。種子島は、天文年中、始めて鐵砲
 を得し處、屋久島は、屋久杉の良材を出す。寶七島之に續
 ぎ七島筵を製す。以往、すべて奄美群島と稱し、中に、大島
 最大にして、大島紬を産す。曾て、隆盛、三たび此に流され、自
 大島三右衛門と呼べりき、東に並べる喜界が島は、平氏を
 圖りし平康賴、僧俊寛等が、謫せられし處にて、その康賴が
 詠は、至情を籠めたり、沖の永良部島は、永良部鰻の名と共に
 聞ゆ。

第六 宮崎縣

管轄 日向

霧島山は、大隅に跨り、山峯二に分る、東なるを矛峰と稱
 し、盛んに硫烟を噴けり、天孫の降臨し給ひし高千穂峯は、
 即、是なりといへり。西なるを韓國嶽と稱し、晴天には、遠
 く韓國を望むべきを以て名くとぞ、西麓霧島神社には、太
 古諸神を合祀せり。大淀、五箇瀬の二川、南と北とに流る。
 都城は、大隅との國境に近く、商業稍賑ひて、萬年青を産
 す。大淀川の下流に、宮崎あり、縣廳の所在なり、神武天皇
 を奉祀せる宮崎宮は、この北一里にあり、郷人、益、此の靈跡
 に光を添へむとし、大いに盡す所あり。是より日向灘を
 右にして、北に行けば、佐土原、高鍋、細島、延岡の諸邑は、皆海
 に近し、細島は縣下第一の港にして、延岡は北方の名區な

り。延岡より五箇瀬川を溯れば、高千穂村あり、或は、高千穂宮の跡なりともいふ。

蓋日向は山多くして、地未開けず、人煙稀疎なるを以て、人或は九州の臺灣を以て目するものあり、上代の遺跡數多く、又、日本最古の帝都たりし地に於て、此の如きは、奇なりといふべし。されば、産物の工藝に係るもの少く、その九州第一の山林あるを以て、林産地なることを記すべし、日向炭、樟腦、椎茸の類、是なり。

第七 大分縣

管轄 豐後 豐前 東半

此の縣は、阿蘇火山脈の九州島に於ける終點に當り、久

住由布、鶴見、及び國東半島の兩子山等、最、有名なり、されば、温泉處々に涌出し、別府、濱脇、殊に名あり。

日向より來りて、佐伯、臼杵の諸港を過ぎ、佐賀、關港に至る、此は、豐後海峽を隔て、伊豫の佐田岬と相呼應せり、早吸、日女神社ありて、創建は、遠く太古にありきといふ。

大野川を渡り、大分川の注ぐ所、別府灣邊に大分町、二萬あり、縣廳の所在なり、此より國東に至る間、豐後表の産多し。

豐前、豐後と筑前とに跨りて、英彦山あり、休火山にして山上に、英彦山神社あり、由來、甚、尊し。山國川その東麓より發して、福岡縣境を流る、河の沿岸、數里が間、群峯水を夾みて、奇勝を成すもの、即、耶馬溪にして、一に賴山陽の筆力によりて、名を海内に揚げしなり。河口に中津あり、福岡

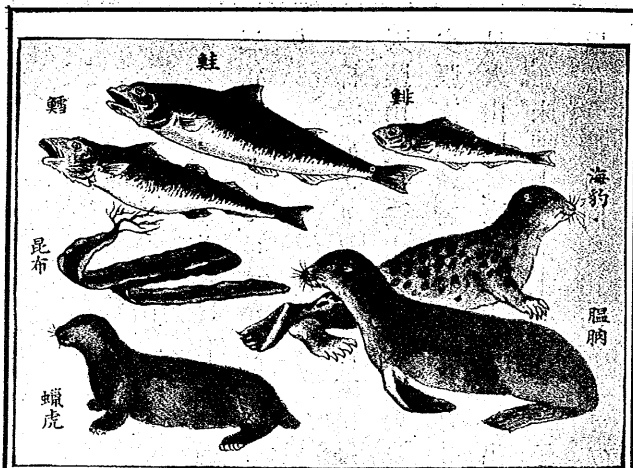
縣より來れる、九州鐵道支線は、此を過ぎて、宇佐に達せり、宇佐八幡宮の鎮所にして、和氣清麿が清節は、永く歴史に光あり。

二 北域

第一章 十州區

本州と、津輕海峽を隔て、十州の大島あり、面積九州の二倍餘に當る、北海道は、之に、千島列島を加へて呼ぶ名なり。

樺太島より來れる樺太山系は、北端宗谷岬より入りて、天鹽山脈、日高山脈となり、南襟裳岬に没す、其の間、天鹽嶽、夕張支山脈、神威嶽等を崛起す。此の山系に交叉する千島火山脈は、東察加半島より出で、千島列島を噴起し、東端知床岬より西走し、多く雄峻なる峯巒を崛起す、良牛山跡佐登雌、雄阿寒山、石狩嶽おふたてしけ、十勝嶽等はなり。



北 域 の 産 物

西方、後志火山彙、及び渡島火山彙は、既に上篇總論中に説きたるが如し。
全土の形、赤罽あかきの尾を掉へるに似て、地四方に擴りたるが故に、山嶽繁けれど、平野亦意の如く發達し、大河少からず、石狩、天鹽、十勝川は、皆五十里以上にて、之を本區の三大

川とし、石狩川最長し。沿岸の出入多きは、西南瀕海の地にして、其の餘は、根室附近の外、いと稀なり。

氣候は大抵寒冷なれど、東西海岸に若干の差あること、猶中域に於けるが如し、積雪數尺に及ぶ地はあれど、本州の北國地方などの甚しきには若かず。

十州地方は、我が寶庫の一にして、水産、鑛産、農林産の富は、益採りて、益盡さず、地北海に偏在するの故を以て、顧る者、甚多からざるのみ、殊に、水産には、鮭、鮭、鮭、昆布、鱈等、凡一年五千萬圓の産あり、鑛産には、石炭、硫黃、銅、石油等あり。

本島は、其の初蝦夷と稱し、あいぬ人の住居となりたりしが、漸次領域を、大和種族に縮められ、今は、其の數二萬に足らず、多く内地に逃竄せり、此の土人には、慄悍なるもあ



あ い ぬ 風 俗 之 圖

れど、概王化に遵ひて、
 従順を致し、内地人の
 爲に勞力せり、されど
 要するに、蒙昧の民な
 れば、風俗粗野にして、
 茅屋に住み、漁獵を事
 とし、酒、烟草を嗜むこ
 と他に過ぎたり、衣服
 は、麻布に似たる「あつ
 し」といふを著け、殊に、
 男子の長髯を愛する
 と、女子の口邊に黥す

るとは、一對の異風といふべし。

北海道廳を札幌に設け、その下に、十九支廳を置きて、十
 州、及び、千島を分轄せり。

第一 渡島國

渡島は、十州の西南半島、魚尾に似たる部を占め、北方膽
 振に亘りて、火山多し、これ、本州中央火山脈の先驅を成す
 ものなり。

本州の青森と、南北通航の要衝に位する、大港を、函館區
 とす、函館支廳此に在りて、近地を管轄す、人口七萬八千に
 及び、十州區第一の都會たる上に、後志の小樽との間、已に、
 函館鐵道の工事を起し、室蘭軍港と、海上の交通あれば、市

況いと賑盛なり。近傍五稜廓は維新の役に、榎本、大島等の據りて、官軍に抗せし處、有名なる函館氷は、即此の産なり、又、その近海は、膽振に亘りて、鰺の漁、盛大なり。北方、龜田支廳の所在地なる七飯を過ぎて、内浦なる、森港に達す、森は、室蘭と相對せる一要害なり。西南端、福山は、松前支廳あり、松前氏曾て此に據りて、當地方を治したりき、其の北海道に江差あり、檜山支廳の所在なり。凡此の邊より、日本海岸を宗谷に至る間は、鯡の最好漁場にして、これ實に、全國第一等の漁業地なり。

第二 後志國

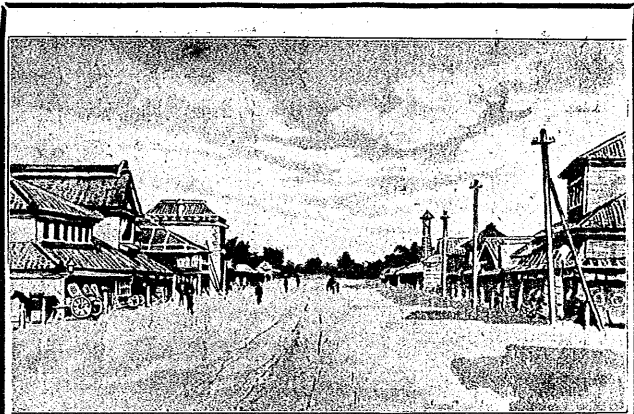
炭礦鐵道、小樽より東して、石狩に入るあり、函樽鐵道成

らば、便利大に南方に開けむ。

後志火山、膽振より連り、平地いと少し。小樽は、五萬四千西岸唯一の要港にして、戸口、日に増し、開港場の一たり、汽車一時間にして、札幌に到るべし、此に小樽支廳あり。西岸の岩内、いさな壽都は、共に、支廳の所在にして、近海は、鯡の大漁場たり。壽都の南、利別川は、砂金の産を以て著る。

第三 石狩國

炭礦鐵道、後志より來て、札幌を過ぎ、岩見澤にて室蘭より來れる者と相會し、北方、砂川以北は、官線連絡して、旭川をも後にし、今や、將に天鹽に入らんとす、その間、炭坑に向ひて分派するもの、二三條あり。



石狩は、我が國第一の石狩川に沿へる大平原を包み、又山海の富を獨占して、有望の地たり。東方山脈中の空知、幾春別、幌内、夕張等は、皆炭坑の錚々たるものにて、本道無双の産炭地たり。炭鑛鐵道は、即之を運搬せむが爲に通せるなり。又處々に石油の出づるあり。

石狩川は、源を石狩嶽よ

り發して、東北平野を迂廻し、雨龍、空知、夕張の諸川を併せ、漫々海の如くにして、日本海に放射す。流程、百六十餘里、其の半は舟楫を通はすべく、下流に於ける鮭漁は、盛大を極めたり。

札幌區三萬七千は、此の川の支流、豐平川に沿ひ、街路甚整ひ、繁昌、函館に次ぐ、北海道廳、及びその札幌支廳、農學校あり。此地、工業の中心として、麥酒、砂糖、麻布の製造盛んに行はれ、又、農畜の産に豊かにして、林檎、甜菜の如きは、著く生育す。

岩見澤は、交通の衝に當り、空知支廳あり。旭川、亦、上川支廳の所在なり。こゝは、本道の最寒地と稱せらるれど、地味肥沃にして、屯田の經營、大に進み、第七師團司令部を移

して、北域の要鎮とし、殊に、離宮撰定地ありて、民心大いに此の地方に向へり、汽車の將に此に達せんとする際に、神居古潭の絶勝あり、石狩川の兩岸相逼りて、懸崖幾百仞を立てたるを、車窓より座ながらに觀ることを得。

第四 天鹽國

石狩より來れる官設北海道鐵道は、將に、縦に當國を貫き、北端宗谷に達せむと計畫せらる。

天鹽川、此の計畫線と並行し、天鹽嶽に發して、北邊に注ぐ、實に、本道第二の長流なり。國の西南端に、雄冬嶺あり、嶮岨の間、厓かに細徑を穿てり、此の類、本島處々にありて、蝦夷の七嶮道と謂ひ來たり。

増毛は、國中最良の港にて、漁業行はれ、支廳の設あり、海路、小樽と交通す。留萌、苫前亦、沿岸の名ある港とす。

第五 北見國

國境は、山を負ひて、嶮峻なれど、疇哥斯科海濱は、平沙數十里に連り、此に猿瀾湖、常呂川を初とし、河湖數多散在せり。北端に近く、利尻、禮文の二島あり、漁業盛なる地にして、利尻島の中央には、島と同名の休火山あり、眺望快活なり。

稚内に宗谷支廳を置く。宗谷之に近く、その岬は露領樺太と、一葦帶水を隔てたり。枝幸の附近は、近日、沙金の大産地と認められ、内地より渡航するもの多し。網走は、

海底の漸次隆起したる處と稱せらる、亦支廳の所在なり。

第六 膽振國

炭鑛鐵道室蘭に起り、苫小牧、追分を経て、北方石狩に入る、追分より、夕張炭山に通する支線あり。

膽振は、火山に富める地にして、西北にまつかり嶽あり、惠庭、樽前、有珠の諸嶽は、北より南に連りて、その間、支笏洞爺の兩湖を湛ふ、まつかり嶽は、從來、後方羊蹄山と稱へしものにて、一に蝦夷富士といふ。

室蘭は、内浦に臨み、開港場の一にして、やがて又軍港を開かれむとす。海陸交通の便を兼ね、室蘭支廳の所在たり、灣の西方諸郡は、砂鐵の産多し。

第七 日高國

日高山脈、東北境に走り、海岸に出入なし、南端襟裳岬は舟行危しと稱せらる。沙流川に沿へる平取村は、曾て、源義經が、奥州を落ち延びし處と傳へて、その神祠あり、土人の尊崇淺からず、又此の村は、あいに土人の首府とも稱すべき地にて、その族類蕃殖せり。新冠は、馬、牛の牧場と聞え、浦河は、日高一國を管する支廳の所在なり。

第八 十勝國

東北石狩との界は、千島火山脈、及び、縦貫山脈の交る處として、著名の高峯群立せり。十勝川は、此の間に出于、附近

の廣野を潤す。帶廣、其の中流に位し、河西支廳、此に在りて、當國を管せり、市街大成し、鐵道全通せば、其の盛は期して待つべし。

第九 釧路國

北境は、兩阿寒山等の火山高く聳え、近邊硫黃の產出巨額に上る、殊に、跡佐登より出づるもの、他處に比類なく、之を鐵道にて標茶に運び出し、更に釧路川を舟にて下し、釧路港に集む、釧路は開港場の一にして、又、支廳在り。是より東方、根室の納紗布岬に至る海岸一帯、昆布の生茂頗盛なり。厚岸は、一良港にして、且近く牡蠣島の湖あるを以て著る、湖中數十の小島、悉く牡蠣より成り、之を取るに、

盡くることなし。

第十 根室國

北には、千島火山脈連亘して、良牛山最嶮し。納紗布、知床の兩岬、兩北端に突出して、口を開けるが如く、千島列島は、此の口より、石鹼玉を噴き出せるにも似たり。西別川は、細流なれど、鮭多し。根室には、支廳あり、東方の要港なれど、冬季流氷、此の地を鎖す時は、船は轉じて、花咲港に集る。

第二章 千島列島

根室灣の國後島より、長く東北に延びて、東察加に近き占守島に至る三十餘の島嶼を、千島列島とす、これを、千島火山脈の貫く處にて、その主要なる島は、國後、擇捉、得撫、新知、捨子、古丹、溫禰、古丹、幌筈、占守等なり。



占守嶋之圖

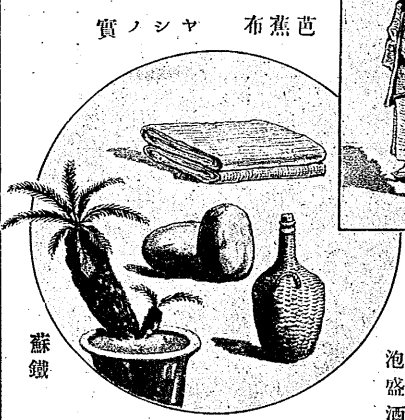
擇捉は、最大の島にして、其の紗那には支廳あり、海上鱒、鱈等の産多し。得撫島は、臘虎を以て名あり、凡、千島近海、鰐、鰐獸、海豹、海狗、海馬、鯨等の海獸に富みたれば、外國の密獵船時々、此の邊を窺ふことあり。列島中、得撫以北は、初露國の領たりしを、明治八年、我が樺太島と交換せり、最北占守島には、報效義會員の屯するありて、警備、開拓を事とせり。

三 南域

第一章 沖繩縣

琉球諸島は、九州區なる薩南諸島の南に續きて、臺灣島に至るまでの、五十餘島を總稱す、之を、沖繩群島及、先島群島の二に大別す、前者の中、沖繩島最大なり、後者の中、更に宮古島を中心とする、宮古列島と、石垣島、西表島を中心とする、八重山列島とを分てり。

諸島は、沃野乏しく、琉球芋の如きは、米穀に代へて土人の常食となせり。地、熱帶に近しいへと、海風大いに暑氣を和ぐ、霜雪は、終年、見ることなく、唯、暴風の頻々襲ふところあるを難とす。植物は、熱帶性のものに、芭蕉、椰子樹、蘇



芭蕉布 質ノシヤ

泡盛酒

蘇鐵

沖繩の風俗及産物之圖

鐵などあり、飯匙青てふ毒蛇は、人の甚く畏るゝところなり。そも、此の島は、源爲朝が伊豆より逃け來し地にて、その子、舜天王、琉球王となり、子

孫此に治せし間、日本支那兩國、交之^{とも}を屬領とせしが、維新後、全く我が版藩に收めて、沖繩縣とし、政治、毫も内地と異なることなし。其の土人は、内地人と同種なるべけれど、言語、風俗は、趣を異にするものあり、男子も、髪を束ねて、簪を挿し、衣服寛濶にして、帶もて纏ふ。

那覇區は、沖繩島にあり、人口、三萬五千、縣下第一の都會にして、縣廳あり、土人此に集りて、盛んなる市場を開くを常とす、其の港は、開港場となり、内地及び清國に往復の船舶、出入せり、産物に、琉球絢、砂糖、朱塗、及び豚あり、海上には鯨多し。

首里區は那覇に近く、舊藩主、尙氏の居所たりし處、泡盛酒の製あり。運天港は本島の良港にして、屬島中の阿護、

西表島の船浮と共に、三港の稱を得たり。

諸島中、盛んに芭蕉布、上布、紬を織り出す、其の精巧、堅緻なる、古來稱揚せらるゝ處なり、すべて、當地に産する甘藷、絢、上布の類は、いづれも初は、薩摩を経て、世に弘まりたりければ、今も、薩摩の名を冠して行はるゝもの多し。

第二章 臺灣區

臺灣は琉球諸島の南に接し、臺灣海峡によりて、支那と隔つ、形恰鼯鼠とも見ゆ、その間に澎湖群島あり、南は比律賓群島と相對し、東南屬島に、火燒嶼及び紅頭嶼あり。本島の面積は、率九州の大きさの如し。

本島中、數條の並行せる山脈ありて、大抵南より北に向ふ、中に新高山脈は、稍東に偏倚して脊梁を成し、一万尺を超ゆる峻峯、數座あり、新高山、最高くして、富士を凌ぐこと、殆五百尺なりといふ、初よりそん山と稱せしを、勅ありて新高と命名せさせ給へり、此の外秀枯欒山、しるび山等、之に次ぐ。熱帶近き地方なれば、茂樹綠衣を成して、山を

被ひ、海上より望みたる景色、比びなきを以て、外人は、夙に美島の義なるふおるもおさを以て本島に名づけつ。

新高山脈東偏するを以て、平野西方に開け、市邑、港津に見るべきもの多し、東岸は、絶壁海に迫り、地甚開けず、蕃人多く之に棲む。

此の區は、本邦中最熱き地方にして、最高溫度攝氏三十五度を超ゆることあれど、平均二十二度餘にして、さきで健康を害ふにもあらず、雪は、冬季、山間に見ることあり、唯琉球と等しく、比律賓海上の暴風の衝に當りて、被害常に輕からず。產物中砂糖、茶、樟腦の三品は、至重のものにて、之に次ぎては、米、果實、魚、鹽、石炭、木材等あり、水牛、豚も盛んに飼養せらる。



生 蕃 之 圖

百九十六

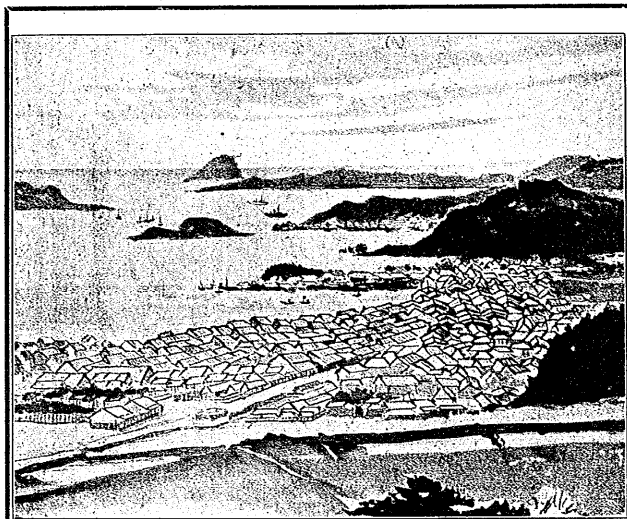
本島初、高砂^{たかみ}と稱し、足利氏の末年、倭寇の本據とせし處なり、次いで、和蘭人一時此を占領せしが、一たび、明の遺臣鄭成功が旗下に屬し、又其の歿後、清國の有となりぬ、明治二十七八年の戰役を了へ、馬關條約の結果、支那より收めて、我が新領土とするに至れり。

臺灣の住民に、日、清人、及び、土人あり、土人は、大抵、馬

來人種より出でたりと覺しく、その稍理非を辨へて、正業に就けるものを熟蕃といひ、兇暴野蠻にして、人道を知らざるものを生蕃といふ、生蕃は最、招撫し難く、部落を結び、常に兵器を帶して、殺掠鬭争を事とす、又、甚酒を嗜み、獸肉を啖ひ、衣服、住居の定制なくして、一見蠻人の風、明かなり、その人数、凡七万五千なりといふ。

臺灣には臺灣總督府あり、その下に、臺北、基隆、宜蘭以下の二十廳を分ち、各廳に廳長一人を置き、臺灣總督の指揮を承けて、部内の行政事務を管理す。

第一 北部五廳 基隆、臺北、深坑、桃仔園、新竹
長崎港より、凡二晝夜程にして基隆港に着す、官設臺灣



基隆港之圖

鐵道は、此より起りて、臺北、桃園の二廳を過ぎて新竹に至り、以南臺南廳の灣裡街までは輕便鐵道を以て行はれ、其より打狗までは、又、通常の鐵路あり。基隆は、灣口、外に開きて、風波の

憂なきにあらざれど、本島中にては、屈指の良港なれば、開港場となり、又、廳の所在なり、築港の計畫、着々實現せらるるを以て、今後は、大いに見るべきものとならむ。こゝは、嘗て、清佛交戦の時、激闘ありし地なり、近傍、石炭、金、硫黃の産多し、臺北まで汽車程、二十哩。

臺北は、淡水河に瀕せり、平野の間に位し、基隆、淡水の二港を東西に控へ、大稻埕、艋舺の二市を、南北に率ゐる、市況盛んにして、人口七万に及び、本區第一繁昌の都會なり、臺灣總督府、臺北廳、混成第一旅團司令部以下、の官衙、國語學校等、こゝに在り、府の四方に、支那風の堅牢なる、城壁を遶せり、艋舺、大稻埕は、共に商業地にして、殊に後者は、本島重要産物の一なる、烏龍茶の中央市場たり。艋舺より、淡水河

を下れば、淡水港あり、一に、滬尾街と稱し、開港場にして、貿易の盛んなるは、基隆にも軼ぎたり。

この東に當り、深坑廳あり、最近の、開廳に係る。

大嵙崁地方は、樟樹、最、生育し、根の直徑一丈を超ゆるもの少からず、之を樟腦に製す、世界中、樟腦の産地は、本島の右に出づるものなし。新竹廳附近は、農産多く、その西に舊港の開港場あり。

第二 東部二廳 宜蘭、臺東

本島の西北隅に、三貂大嶺あり、近衛師團征臺の際、初めて上陸せし處にして、こは、宜蘭廳の北境に當れり。

宜蘭は、廳の所在にて、熟蕃多く住めり、とおむ角の内に、

開港場蘇澳あり、灣内、水深く、東岸一二の良港たり。

臺東廳は、臺灣東面の大部を占む、實に生蕃の巢窟にして、山深く、



臺灣東岸絶壁之圖

野荒みて、未、實情を審かにするを得ず。海岸

は斷崖を立て廻らし、最高きは、水面より七千尺を抜くものありて、絶嶮、峻峭、世界希有の壯觀を呈せり。

花連港は、花連溪の河口に在り。卑南は、卑南大溪の下流に位して、此に廳あり。

第三 西部十三廳 苗栗、臺中、彰化、南投、斗六、嘉義、鹽水港、臺南、蕃薯藔、鳳山、阿猴、恒春及び澎湖廳

苗栗は廳の所在にて樟腦に名を得たり。開港場鹿港は、清國福建省と相對し、大陸に渡るべき最近の地なれば、彼我の往來忙し。

臺中は、廳の所在にして、混成第三旅團司令部もあり、劉銘傳、本島の巡撫たりし時、此に臺灣府を設けて、政令を出せり。大甲は大甲肅を製造するをもて名あり。臺中の西方、彰化廳の在る所は、地大に開けて、大甲、溪大肚、溪濁水、溪等貫流し、米、落花生の産に富む、本島の米は、一

年二回の收穫あれど、質、量共に甚稱すべからず。是より南、南投、斗六亦各廳の所在にて、斗六は樟腦の名産地なり。夏至線の通路に當りて、嘉義廳あり、嘉義より鹽水港廳を経て臺南に至る。

臺南に、臺南廳あり、従前久しく、首府、臺灣府の所在たりし故を以て、戸口古に劣らず、混成第三旅團、此に屯戍す、彼の國姓爺鄭成功を崇めたる開山神社及び孔子以下の賢哲を祭れる文廟あり、濱田彌兵衛が、蘭人の暴を挫ぎしも、亦、此なりき。西に近く、安平港あり、古來臺南と、繁昌相伴ひしかど、巨船の入津に適せざれば、じやんく船多く出入して、砂糖、樟腦の輸出に従へり。鳳山は、南方の一都にて、此に廳を置き、其の西、打狗港よりは、亦砂糖を出す。

鳳山の東、下淡水溪の流域に、二廳あり、一は上流の蕃薯
 廳、一は、下流の阿猴廳にして、共に、近く開廳せられたり。
 恒春廳は、本島最南部を管し、地勢は、東西兩側の餘波を
 受く。その南端を、南岬と稱し、我が國の南至なり、近海に
 珊瑚礁多し。

恒春に廳ありて、一都邑を形れり、瑯嶠灣は、明治七年、臺
 灣の役、西郷都督の上陸せし地にして、當時、最猖獗なりし
 蕃族牡丹社の所在は、此に近し。

東の海上に浮べる紅頭嶼には、一種の蕃人栖みて、言語
 風俗甚奇異なり。

澎湖廳 臺灣海峽中に澎湖群島あり、支那海の咽喉を
 扼し、兵事上の要地たり。地、植物の生育に適せず、落花生、

甘藷等を産するのみ、又、雞、豚を養ひ、鯛、鱸の漁業に従事し
 て、米麥は他方より輸入するなり。

島の數、數十に及ぶといへども、主要の者は澎湖、白沙、漁
 翁の三島なり。此の三島相擁して、中に、媽宮港を圍めり、
 開港場の一にして、灣内水深く、容易に大船を容るべし、本
 區中、得やすからざる良津なり、其の媽宮城は、清政府の築
 造に係り、中に、澎湖廳、及び、兵營あり。

V220.28-62

選新日本地理綱要正誤表					
頁數	行數	誤	正	頁數	行數
五一	八	十五五	十五區	一〇一	五
五四	四	六六川	新瀉	一〇三	五
五九	六	富衛	新瀉	一〇四	三
全	一〇	醬造	阿武隈川	全	二
六九	一二	盛樂大	鐵瓶	一〇九	四
七五	二	間	鐵道	一一〇	一
七九	六	清見瀉	八耶瀉	一一三	四
九一	一	江州	七代	一二二	二
九七	二	米穀	以比	一五三	一〇
九九	二	本洲	筑紫瀉	一五五	七
一〇〇	一六	新瀉	赤瀉	一七四	五
全	一一	新瀉	赤瀉	全	五

明治三十四年十二月六日印刷
 明治三十四年十二月九日發行
 明治三十五年二月廿四日訂正印刷
 明治三十五年二月廿七日再版發行

選新日本地理綱要
 定價金五拾五錢



發行元

著作者 石川 弘
 著作 梅林 寺勝三
 發行 東京市京橋區尾張町新地二番地 合資 會社 田沼 勝之助
 右代表者 田沼 勝之助
 發行 橫濱市尾上町三丁目廿七番地 田沼 太右衛門
 印刷 東京市麴町區有樂町三丁目一番地 大西 鍊三郎
 東京市京橋區尾張町新地二番地 合資 會社 田沼 勝之助
 電話(特)新橋八八三番

新撰
日本地理綱要 終

明治三十四年十二月六日印刷
明治三十四年十二月九日發行
明治三十五年二月廿四日訂正印刷
明治三十五年二月廿七日再版發行

新日本地理綱要

定價金五拾五錢



發行元

東京市京橋區尾張町新地二番地
合資會社 田沼書店
電話(特)新橋八八三番

印刷者 大西 鍊三郎

東京市麴町區有樂町三丁目一番地

發行者 田沼 太右衛門

橫濱市尾上町三丁目廿七番地

右代表者 田沼 勝之助

東京市京橋區尾張町新地二番地

發行者 合資會社 田沼 書店

著作 石川 弘

著作 梅林 寺勝三

216
98

